

42359

教科書文庫

4
8/0
42-1938
20000 63427

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

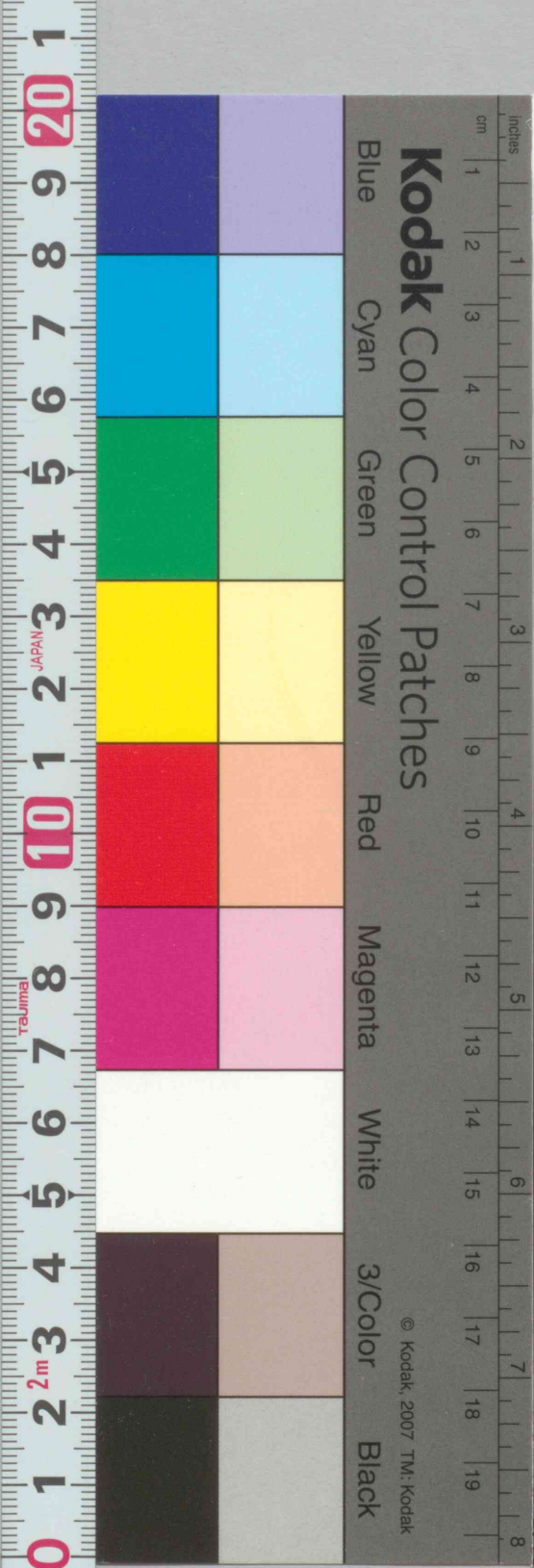


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Iq.1
資料室

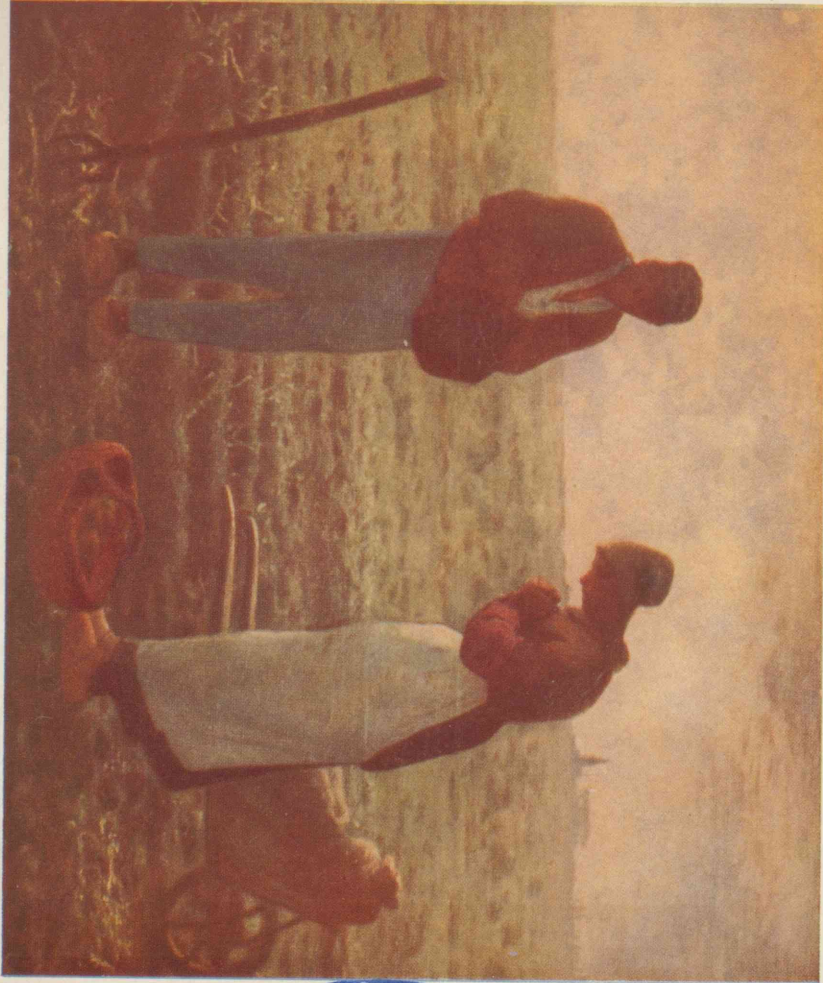
女子國語讀本

改訂版

卷四



資料室



(筆一ノミ)

鐘 晚

広島大学
敬
63427
書

37509

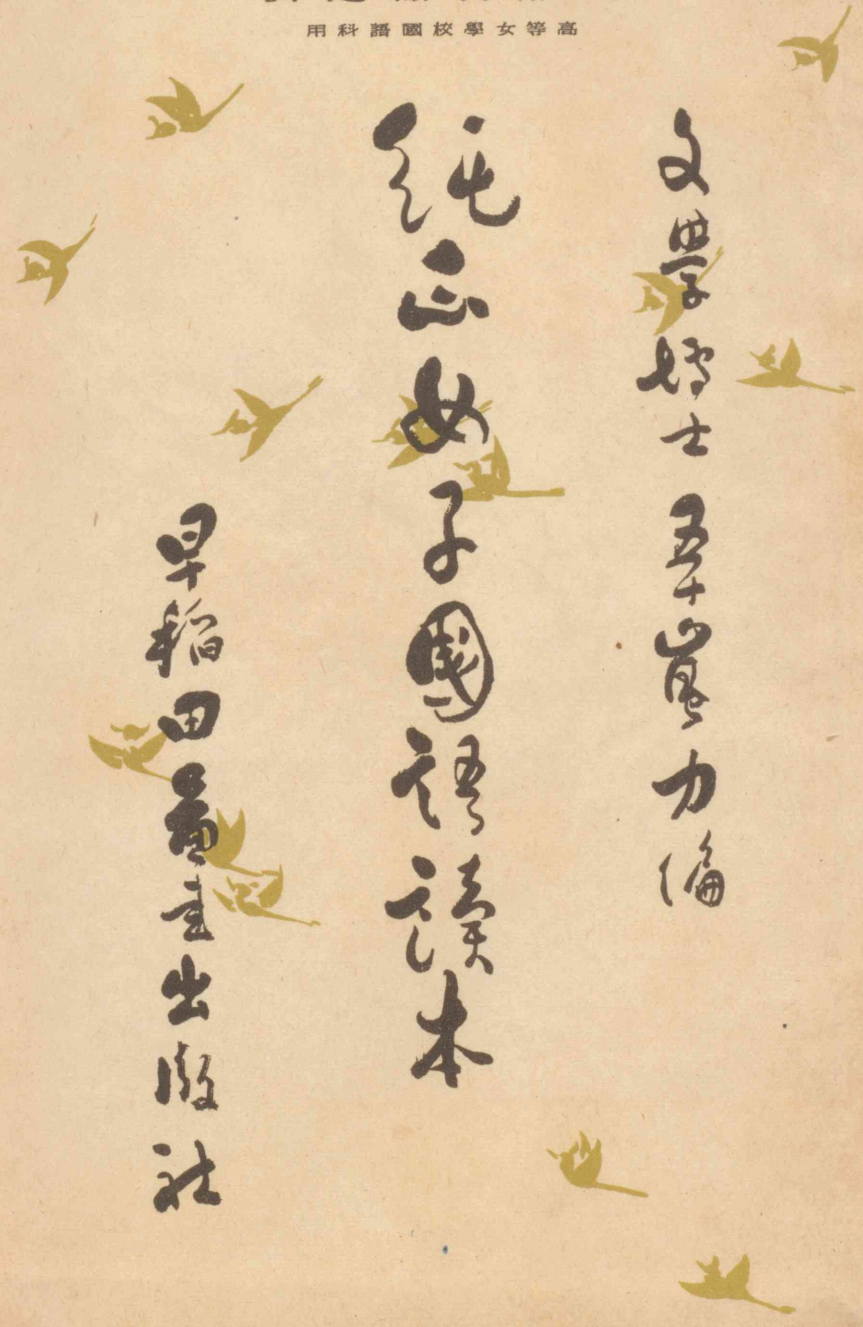
181

昭和三十三年二月五日
文部省檢定
高等女子學校國語科用

純心女子國語讀本

文部省検定
女子教育力編

早稲田書局出版



晩鐘

ウヤン・フランソワ・ミレー (1814-1875) が世評に鞭打たれ、驟然我が本領の藝術道に精進すべく決心して、兼と共に田舎に引込んだことは、岩橋教授の本文に於て美しく物語られてゐるが、その落ちついた先は、二三の先輩美術家のおたスルビソンの森であつた。そこで彼は、自ら半農半畫の生活を送り、また周圍の農民の生活を觀察して、「種時く人」晩鐘「夕べの祈」といふ、「鉢に倚る農夫」「落穂拾ひ」などの名作を完成したが、あまり世評に上らず、却つて弱者に同情し過ぎる社會主義畫家であるとの非難さへ受けたのであつた。その同じ繪が天下の視聽を集めたのは、一八六七年のパリ大博覽會に「晩鐘」「落穂拾ひ」外七點を出品した際に、たま／＼ルビソンの森で親しくした友人のルソワが審査委員長であつてミレーに一等賞を授與してからで、それ以來彼は農民藝術の先驅者として漸次に名聲を博するやうになつた。「晩鐘」の如きは、後年五十三萬五千フランで米國の富豪に購ひ去られたのを、再び七十五萬フランでパリに買ひ戻したといふ逸話さへある。

卷四 目次

一	明治神宮	編者	一
二	昭憲皇太后御作 みゆきに従ひ奉りて		八
三	旅の歌(歌)	(現代十歌人)	一七
四	狩野芳崖とフェノロサ	編者	二一
五	夜叉王(戯曲)	岡本綺堂	三一
六	文宇	木枝増一	四七
七	家庭は合作の藝術品	市島春城	五八
八	ハミレーの晩鐘	岩橋武夫	六三

九 我が家の富
 一〇 蓑 蟲 に(歌)
 一一 備 後 壘
 一二 作歌と修養
 一三 橘 媛
 一四 大 八 洲(詩)
 一五 サ フ ラ ン
 一六 晩 年 の 父
 一七 元 日 や(俳句)
 一八 鬼作左の嬉し泣き

徳富健次郎 七三
 落合直文 七六
 橘 南 谿 七九
 北原白秋 八七
 編 者 九三
 西條八十 一〇二
 森 鷗 外 一〇五
 小堀杏奴 一一三
 近代四俳人 一二六
 新井白石 一二八

一九 名 君
 二〇 大 川 の 水
 二一 紅 椿(詩)
 二二 潜水艦上の或日(講演)
 二三 春寒き多摩御陵に詣でて
 二四 桃
 二五 五箇條の御誓文

菊 池 寛 一三四
 芥川龍之介 一四五
 三木露風 一五五
 穂積律之助 一五七
 九條武子 一六九
 島崎藤村 一七七
 徳富蘇峯 一八一

純正女子國語讀本 卷四

一 明治神宮

威靈を加へざるものなし。

或は槻、樺の並木により、或は蒲葵の叢林によりて、廣前を清め神苑を飾る。

我が國の神社佛閣、樹木によりてその威靈を加へざるものなし。或は杉により、或は檜により、或は樟樹により、或は竹柏たけしげにより、或は槻つき樺やまの並木により、或は蒲葵ひらの叢林によりて、廣前を清め、神苑を飾るなど、舉げて數ふべからず。中には樹木そのものに神靈を認めて社殿を設けざるさへあり。随つて樹木の神社佛閣を莊嚴する趣致様式種々あれども、

國産の樹木の大多數を網羅せり。

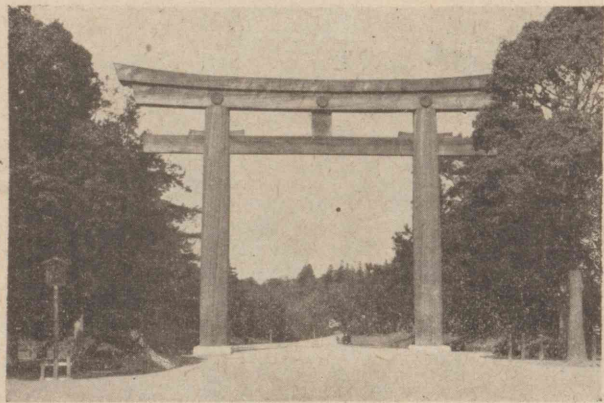
その様式の特殊なる、明治神宮の如きは稀なるべし。殊にその趣致の複雑にして深き意義を含めること、明治神宮の如きは極めて稀なるべし。

十數株の喬松の亭々として聳え立てる趣なり。

明治神宮の神苑は、國産の樹木の大多數を網羅せり。而してその樹木の多くは遠近の臣民の獻納にかゝるものにして、中には赤子自ら遠く負ひ來りて植ゑつけたるもの少からず。かく種類の多く、精神的意義の深き點より見て、明治神宮の神苑は萬國に比類なきものなるが、殊に珍しく貴きは、神門の内、拜殿を正面にして、廻廊に圍まれたる大廣前に、たゞ十數株の喬松の亭々として聳え立てる趣なり。我等はこの計畫が如何なる意義により、何人に考案せられた

我が特有の國土美を發揮したる點。

るかを知らねど、それが我が特有の國土美を發揮したる點



明治神宮の大鳥居と參道

より見、大帝を偲び奉る赤子の心を現したる點より見て、まことに恰好無上の選擇なることを歡ばずんばあらず。

我等をして神宮に詣てしめよ。まづ清められたる參道を過ぎ、長き廣き道の左右に、寒、温、熱の三帯に互れる無數の樹木の、疎密さまざまに植ゑ並べられたるを眺めつゝ、幾曲折の後、恭しく神門を入れば、見よ、地上は一面の白

見よ、地上は一面の白砂に清め

られて、その間より、たゞ赤き太き長き松の十數幹の抜け出でたるにあらずや。而してその長き幹の頂には、翠の圓蓋美しくかざされて、神殿の檜皮を護り奉れるにあらずや。
二十八町四間
約三キロメートル

主役。

砂に清められて、その間より、たゞ赤き太き長き松の十數幹の抜け出でたるにあらずや。而してその長き幹の頂には、翠の圓蓋美しくかざされて、神殿の檜皮を護り奉れるにあらずや。それ松は、我が國土美の最も貴重有力なる要素なり。これを三景に見るに、松島は名の如く松の島にして、八百八島殆ど悉く松をかざせり。天之橋立は二十八町四間の長く延びたる沙嘴、切れ目なくその綠色に飾られたり。嚴島は朱欄海水に映れる社殿のほとりを初として、周圍の海岸より彌山の頂上まで、到る所に、この常磐木を主役として、類ひなき風光の美を發揮せり。その他、瀬戸内海に羅布せる花彩列島より、須磨、明石、舞子、三保、虹、千代、もろくの松

凡そ風景の美に鳴る所、いづれかこの名木の韻致に負ふところなからん。

原、及び無數の湖畔、山頂に至るまで、凡そ風景の美に鳴る所、いづれかこの名木の韻致に負ふところなからん。

翻りて思ふに、



明治神宮の松
(筆子龍端川)

明治神宮の大廣前を十數幹の長松に飾れるは、國粹の樹木美を以て、齋かれませる神の御目のあた

他の樹木、皆神門の外に星羅して、たゞこの木のみを神の側近

りを装ひ奉れるにはあらずや。あらゆる他の樹木、皆神門の外に星羅して、たゞこの木のみを神の側近に奉仕せしめ

に奉仕せしめたる。

たるは、全國の樹木が盟主たる名木を代表として、御傍に仕
うまつらせたるにはあらずや。根より頂まで枝葉の密叢
せる樹木により、御目路を遮らずして、赤裸なる長幹の高く
秀でたる木により、神殿をさやかに望ましめたるは、七千萬
の臣子が仰望の志を成したるものにして、同時に齋かれ給
ふ大帝の國土臣民を見はるかし給ふ大御心に副ひ奉れる
にはあらずや。大帝の御製に

高どのの窓てふ窓をあけさせて

四方の櫻のさかりをぞ見る

大帝、この神境
に鎮まりまし
て、廣き大御前
のこの名木の長

と宣へるあり。恭しく思ふに、大帝、この神境に鎮まりまし
て、廣き大御前のこの名木の長き幹の間より、内苑外苑に植

き幹の間より、
内苑外苑に植ゑ
あつめられたる
樹林を見わたし
たまひ、寶物殿、
繪畫館、競技場
等のあらゆる設
備を見そなは
し、延いては更
に、大東京を通
して、曾て知る
しめしし大八洲
の光輝ある現容
を見さけ給ふな
らん。

ゑあつめられたる樹林を見わたしたまひ、寶物殿、繪畫館、競
技場等のあらゆる設備を見そなはし、延いては更に、大東京
を通して、曾て知るしめしし大八洲の光輝ある現容を見さ
け給ふならん。しか思ふは、畏けれども、國民に取りて、無上
の美しき想像にはあらずや、無上の心強き想像にはあらず
や。

松は日本の選まれたる木にして、美容と、品位と、節操と、重
疊累積せる傳統とを有する樹木なり。今やこの名木を以
て我が大帝の大廣前を飾り奉る。我等はこの計畫の言語
に絶して實に意味深きを感じずんばあらず。

昭憲皇太后
御名は美子。明
治天皇皇后。大
正三年四月十一
日崩御。御年六
十五。

せさせ給ふ

おまれぬ

東宮
大正天皇

昭憲皇太后御作

二 みゆきに從ひ奉りて

明治二十三年十月二十六日といふ日、茨城のあがたへみ
ゆきせさせたまふ。こは近衛兵の演習をしたしく御覽せ
させ給はんとしてなりけり。みづからも從ひ奉るべく、かね
ておほせごとありしかば、いとうれしくていてたつ。この
大御代ならずば、いかで女の身にてかゝることを見んと思
ふに、おのづから心もいさみたちてうちゑまれぬ。御車、上
野の停車場にとゞまる。

やがて樓の上にぞのぼらせたまふ。東宮にも御送りに

大后宮

英照皇太后。孝
明天皇皇后。明
治三十年一月崩
御。御年六十五。
典侍幸子
萬里小路幸子。
侍從長
徳大寺實則。大
正八年歿。年八
十一。

さいつころ

とくより参りたまへり。大后宮よりも典侍幸子御使にま
りて、あつきおほせ言ども奏す。みづからもかしこき御
言葉うけたまはる。かくておとゞをはじめ、送り奉る人々
多かるを、もらし給はず御前近くめしてみことばあり。ほ
どなく侍從長参りて、何ごとともとのひたりと奏す。やが
て劍璽をさきだてて汽車に召させ給ふ。みづからもつら
なれる車にのる。笛の音きこゆるまもなく、烟をあとしし
て、御車はとくすゝみぬ。道のほど大かたは田畑にて、さの
みかはれることもなし。されど、いづこも稻のみのりよき
を見るは、民の爲うれしきことぞかし。埼玉のあがたは、さ
いつころの洪水に利根川の水あふれきとて、民のいたづき

畑つもの

送りつらん

はやう

つかせ給ふ

とうでさせ

ておほしたてし畑つものなども皆あれはてたり。河の如き處もありて、みゆきをろがむ人々も、あるは水に入り、あるは舟を浮かべなす。いかにして一日一日を送りつらんと思ふに、胸いたうなりもてゆく。そこを過ぎぬれば、稻葉の浪、田のものにみちあふれたるけしきに、心もかはりぬ。處のさまめづらしなどいひつゞくる間には、やう水戸につかせたまふ。停車場より御馬車にて行在所にいらせたまふ。こは舊城内にある師範學校をそれと定めたまへるなりとぞ。とばかりありて、例の御對面の事あり。はてさせたまひし後も、いさゝか疲れさせたまふみけしきなくて、あすの演習の方略書などとうでさせて御覽ず。

かけさせ

穴戸

茨城縣西茨城郡の町。

有栖川宮

熈仁親王。當時陸軍大將參謀總長。明治二十八年薨、御年六十一。

北白川宮

能久親王。當時陸軍少將。明治二十八年薨、御年四十九。

岩間村

茨城縣西茨城郡。現在は町。穴戸町の南四

料。こゑ。きこえ。たえま。いさませ。

かく御心にかけてさせ給ふを見奉るもかしこし。この夜も常のごとく十一時におほとのごもりぬ。

二十七日、けふも天氣よし。八時よりいでたゝせたまふ。汽車にて穴戸といふ處までわたらせ給ひ、それより金華山と名付けたる御馬にめさせたまふ。有栖川宮、北白川宮をはじめ、おとゞその外あまたの人々、近衛の將校なども馬にて従ひ奉りぬ。みづからは馬車にて行く。岩間村にいたらせ給ふころ、遠近に畑たちのぼり、つゝの音こゝかしこに聞えて、赤白の旗、風にうちなびき、馬のいなゝくこゑもところどころにきこえたり。たゝかひたけなはならんとおもふころは、つゝの音もたえまなきに、御心いさませたまひて、

末つ方

折々はことかたに御馬すゝめさせつゝ、ねもごろに御覽じたまふ。折しも秋の末つ方なれど、日かげは猶あつくおぼゆるに、更にいとほせ給ふみけしきもなきを、この演習にいでたる兵どもはさらなり、文武のつかさ人なべてかしこみ奉るなるべし。ほどなく終りぬと奏するより、御野立にてしばしいこはせ給ひ、さて汽車にめして行在所へかへらせたまふ。

二十八日も昨日の時刻よりいでたまひて、こたびは成井村にて御覽あり。筑波山近く見えてけしきいとよし。大かたはきのふの如し。されど今日は敵のちかづきたりと思えて、大砲、小銃のおとはげしく、廣き原にもひびきわたり

成井村
現在は茨城縣新
治郡園部・志土
庫兩村に跨る。
筑波山

茨城縣筑波郡に
あり。成井村の
西十二軒。

たかひなん
ふたがる
こちぞ、する

ぬ。上には例の御馬にて、道も定めさせ給はず、森の中、松の林などにわけいりて見めぐらせたまふに、木の枝の御あぶみにかゝるも、いとかしこし。みづからも、車よりいでて小銃の連發又は大砲のうちかたなども見ずやと附添へる士官のいふに、さらばとておりたつ。黒けぶりたちのぼる中に火氣見えて、はげしき音のきこえたる、いといさまし。事あらん日は、親妻子をかへりみず、君のため命をすてたたかひなんとおもふに、いとたのもしくはあれど、又いたはしくて、胸もふたがるこちぞする。今日の演習も果てぬれば、御野立にて晝のおものきこしめす。それより御馬上にて觀兵式、分列式御覽ず。みづからは例の馬車にて見る。

小松宮
彰仁親王。當時
陸軍大將。明治
三十六年薨。御
年五十八。

ことわり

常磐公園
水戸市の西郊常
磐村にあり借樂
園ともいふ。
好文亭
樂壽樓ともい
ふ。園の西隅に
あり。
徳川昭武
徳川齊昭の子。

終りて審判あり。小松宮はじめ將校うちつどひて、御まへ
にすゝむ。兩日のいたづきをねぎらひ給ふみことばあり
かたじけなみ奉りて敬禮するさま、見るもめでたし。小松
宮には兩日の演習のよしあしを高らかにことわりたまひ
ぬ。しばし御休みありて、汽車にて行在所にかへらせ給ふ
御道より、おぼしたゝせて縣廳へ臨幸ならせたまふ。けふ
はあやにくの御風のこゝちにて、れいならず見えさせたま
ふを、もてかくして、かくつとめさせたまふ、いとかしこし。
みづからはおほせごとによりて、常磐公園なる好文亭と
いふところにゆく。いたりつけば、徳川昭武その外人々々出
迎へたり。梅あまた植ゑたる林あり。こは事ある時の爲

常磐
碁盤
据ゑ。

仙波湖
水戸市の東南に
ある沼。

中納言齊昭
舊水戸藩主。勤
王家。萬延元年
(三五〇)歿。
年六十一。烈公
と諡す。

に實をたくはへんとてなりとぞ。さまさまの木立ありて、
庭の作りざまいと面白し。老松のかげに石の碁盤、將棋盤
据ゑおきたる、珍らかにて、しばしたちよりて見る。高きと
ころなれば、家のうちより仙波湖見わたさる。十五夜の月
のさしのぼるけしき、いとよし。色づく小田も見おろされ
たり。こは中納言齊昭の世をのがれて後、心やすくすまひ
して民のなりはひを見んために造りしといふ。さもある
べくおもはる。家の内廣らかにて、杉戸には詩の韻字のこ
らずかゝせて、詩人を招く時の爲とし、又五十音、てにをはを
かゝせて、歌人のためとしたる、心しらひのあつさを思ふに、
いとゆかし。また板敷あり。こゝは心ある人々にをりを

弘道館
天保十二年(二五〇二)に齊昭が建てし藩の學校。

記

弘道館記、齊昭の撰し、且つ揮毫せしもの。

涙ぐまれ

卦一卦

おほせ

りみきなどあたへし處なりとぞ。たちかへる道のほど、弘道館の碑を見る。八角の堂のうちに寒水石の大きやかなる立てり。世に知られたる記を、自筆のまゝほりいれたるなりけり。一句一句讀みもてゆくに、その人の御國を思ふ心ざししたはれて、涙ぐまれぬ。戸びらにはこまやかなるほり物あり。かもるとおぼしきところには、易の八卦をほりつけたり。昔は此處に學舎あまたありきといふ。げにめづらしきところをみしかな。是も上のおほせごとなくばといとうれしくて、時の過ぐるも覺えず。人々夜更け侍りぬべしといふにおどろかされて、いそぎかへる。月夜なれど、かぶり火たき、提灯などあまたてらして晝のごとし。

つくすべう

多かれ(多けれ)

さわがし

昭憲皇太后御集
大正十三年文部省發行

佐佐木信綱

歌人、國文學者
文學博士
竹柏園と號す
三重縣の人
明治五年生

御まへに參る。上には六時ばかりに歸りましましきとききて、後れ侍りぬなど奏するに、うちわらはせたまふ。好文亭のことつばらかにとおもへど、とみにいひつくすべうもあらねば、かたはしのみ奏す。
しるさまほしきことども多かれど、筆もすゝまず。ことにあす東京へかへりまさんとて、御調度どもとり納むるにものさわがしければ、かきさしてやみぬ。

〔昭憲皇太后御集〕

三 旅の歌

湯のやどりかどに吊せるから鮭の

鮭(鮭)

鱗に寒き山の冬の日

佐佐木信綱

正岡子規

俳人、歌人

名は常規

愛媛縣の人

明治三十五年

(五三)歿、年三十六

鎌倉にわが来て見れば宮も寺も賤の藁やも
梅咲きにけり

正岡子規

われは練る昨日は都大路また今日は柑子の
かんばしき道

吉井 勇

吉井 勇

歌人、文學者

東京の人

伯爵

明治十九年生

川田 順

歌人

東京の人

明治十五年生

庭の上に陽炎の燃え微かにて人居らぬかも
夢殿の晝

川田 順

窪田空穂

歌人、國文學者

早稻田大學教授

名は通治

長野縣の人

明治十一年生

椰^{ココ}のかげつれづれげにも人を見て蹲りゐる

窪田空穂

ほととぎす東雲^{しののめ}どきの亂聲に湖水は白き波

與謝野晶子

與謝野晶子

歌人

故寛氏夫人

大阪府界の人

明治十一年生

齋藤茂吉

歌人

醫學博士

山形縣の人

明治十五年生

西空にしづかなる雲たなびきて近江の湖は

齋藤茂吉

土岐善麿

歌人

東京朝日新聞記者

號は哀果

東京の人

明治十八年生

汽車おりて電話かくればここにしてみかし

土岐善麿

の友の聲聞えたり(奉天)

與謝野 寬

歌人
號は鐵幹
京都の人
昭和十年歿
年六十三

わが船のけぶりの末に星見えて夕汐たかし
天草の灘

與謝野 寬

金子薫園

歌人
名は雄太郎
東京の人
明治九年生

かへり來て二日三日はまつはれる旅の心の
なつかしきかな

金子薫園

木々はみな聳え
て空に芽をぞふ
くかなしみてを
れば踏む草もな
し
牧 水

木々はみな聳え
て空に芽をぞふ
くかなしみてを
れば踏む草もな
し
お水

蹟筆水牧山若

若山牧水

歌人
名は繁
宮崎縣の人
昭和三年(三五六)
歿、年四十四

幾山河越えさりゆかばさびしさの終てなむ
國ぞけふも旅ゆく

若山牧水

狩野芳崖

明治の大畫家。
長府の人。明治
二十一年(二五八)
歿、年六十一。

四 狩野芳崖とフェノロサ

我が國に於ける近代的な美術展覽會の嚆矢ともいふべき第一回繪畫共進會が上野に開かれたのは、明治十五年の九月であつた。飛んで翌々年の四月に、その第二回が同じ上野に開かれた。維新以後十幾年、歐化の思潮が全國に瀰漫して、學者、政治家、教育家、誰一人由緒深い我が國固有の藝術を顧みる者がなかつたのに、今や國粹保存の機運が漸く芽ぐみ始めて、とにかく政府主催の下に、國本位の繪畫展覽會が開かれる運びとなつたのである。久しく陋巷に埋れてゐた畫家達が奮ひ起つて出品を競つたのも無理はない。

フェノロサ

(1853-1896)
アメリカのマサ
チューセッツ州
の人、明治十一
年(二五三)來朝。

陋巷に埋れてゐた。

心血を注いだ作品。

狩野芳崖もこの機運に乗じて奮起した一人であつた。けれども、彼が心血を注いだ作品も、當時の社會からは殆ど顧みられなかつた。第一回目は、たゞ陳列されたといふだけであつた。第二回目は三等賞を貰つたが、それは入賞中の最下位のものに過ぎなかつた。後者は「花下奔馬の圖」と題して縦四尺、横二尺程の、小幅ながら極めて見事な出來で、作者も私かに許した傑作であつたが、しかもそれが社會から殆ど顧みられなかつたのみならず、審査員からもその眞價を認められなかつたのであつた。

一尺
約三十センチ。

さすがの芳崖も、内心がっかりしてゐると、或日不思議な客が彼の陋屋を音づれた。客は碧眼紅毛の西洋人であつ

た。取次に出た彼の妻は、少しく狼狽した氣味で、あたふたと芳崖の居間へ來た。

「妙な人が訪ねてまゐりましたよ。あなた、西洋人が……」

「西洋人？」 芳崖も怪しんだ。

「一人でか？」

「いえ、通辯が隨いて來まして、先生サロの今度展覽會へお出しになつた御作を拜見して、大變感心しま



したので、急にお目に懸りたくなつて伺ひましたと、かう申します。」

芳崖の眉はピリ、と動いた。

眉がピリ、と動いた。

「西洋人の癖に生意氣な口を利きを。不在と言つて追つ拂つてしまへ。」

「でも、居りますと言つてしまひました。」

「ぢや、仕方ない。氣分が悪くて臥せつて居るとでも言つておけ。」

會ふのは厭だ。」

夫の氣象を知つてゐる妻は、争つても無駄だと思つたので、玄關へ出



狩野友信

て、その通りに斷つた。

西洋人は、その日はそのまゝ引取つたが、二三日すると、また訪れた。そして今度は芳崖の入魂なる狩野友信の紹介

争つても無駄。

狩野友信
畫家、濱町狩野家の裔。大正元年(三七三)歿、年七十。

卓絶した鑑識を有つてゐる。

日本畫の眞趣が味解されるわけがない。

狀を持つて來た。それによると、この人はエルネスト・フェノロサといふアメリカ人で、東京大學にお雇教師として數年來教鞭を執つてゐる學者である、そして東洋美術に對して卓絶した鑑識を有つてゐるといふことである。

これを讀んだ芳崖は、さすがに前のやうに面會を謝絶する譯には行かなかつた。けれどもいかに友信の證明があるにせよ、こんな西洋人に日本畫の眞趣が味解されるわけがないと思つたので、洒落な芳崖は、一つ試験をして見ようといふ氣になつて、彼を伴なつて舊藩主なる毛利公の邸へ出かけた。

毛利邸へ行つて、芳崖は公爵家所藏の懸物や繪卷物をあ

會我蛇足

足利期應仁頃の
畫家。李秀文の
子、名は宗憲、通
稱は式部、道號
は宗丈、文明十
五年(三四三)歿。

とからあとからと出しては示した。けれどもこのアメリカ人は、たゞ「ハア／＼」と言つて見てゐるばかりで、容易に感歎の詞を洩らさなかつたが、最後に女中部屋から會我蛇足の屏風繪を取出して見せると、彼は始めて會心の笑みを浮かべた、そして言つた。

「これはいゝ。これは實にすばらしい傑作です。」

これを聞いて、芳崖は驚歎した。實をいふと、それまではわざとさまでにもない物ばかりを仰山にして見せたので、價値ある作物は、やはりこの蛇足一つだけであつたのである。そしてその傑作をば、わざとむさくろしい女中部屋から引出して來て見せたのであつた。

胸襟を開いて語り合ふ。

こゝに於て芳崖は始めて胸襟を開いてフェノロサと語り合ふ氣になつた。そして話せば話す程、この米國の學者の並々ならぬ鑑識と蘊蓄とに感心した。そして西洋人の中にもかういふ人がゐるかと思ふと、自分の今までの考違を恥ぢずにはゐられなくなつた。

フェノロサは言つた。

深い憧憬の情を有つて居りました。

沈衰の極に陥つて居ります。

「私は國に居つた頃から、日本の美術に對して深い憧憬の情を有つて居りました。けれども腹藏なく申すと、實際日本の土地を踏むに及んで、すっかり失望したのです。過去の日本美術は偉大です。しかし現在のそれは沈衰の極に陥つて居ります。それは今度の共進會を見ても

獨創といふものがない。

どうだらう、この恐しい力は！
熱は！ 私の求めてゐたものはこれだ！
これであつたのだ！

よく分ります。あの會には、御國の一流の畫家の作が幾百と陳列されて居るのに、それが悉く死んでゐます。みんな古人の眞似事をやつてゐるばかりで、獨創といふものが少しもありません。大きな期待を懷いて會場へ行つただけに、私は實にがっかりしました。さうして、もう諦めて歸らうと思つた時に、あなたのお作がふと目に留つたのです。私ははつとして四邊あたりにが急に明るくなつたやうに感じました。どうだらう、この恐しい力は！ 熱は！ 私の求めてゐたものはこれだ！ これであつたのだ！ 私は思はず口へ出して、さう言ひました。こんな優れた作家があるのに、どうして日本の社會が認めない

いのであらう、何とも言はないのであらう。とにかく私はその人に會はなければならぬ。會つてその人の意見をも聞き、私の思つてゐるところをも述べなければならぬ。さう思つて、この間もお訪ねしたやうなわけなのです。あの時はお目にかゝれませんでした。今日はかうして十分お話を伺ふことが出來て、こんな嬉しいこととはありません。

けれども嬉しかつたのは、たゞフェノロサ一人ではない。芳崖は更にそれよりも嬉しかつた。餘りにも無理解な一般世間の仕向に對しては、さすが不屈の芳崖も、ともすれば絶望的の氣持にならうとしたが、もう今日からは悲しむに

餘りにも無理解な一般世間の仕向に對しては、さすが不屈の芳崖も、ともすれば絶望的の氣持

にならうとした。

も歎くにも及ばなくなつた。彼には今や眞に己を知つてくれる友が出来たのである。

その日を始として、芳崖とフェノロサとの交情は日増し

確固不動の自覺を得た。



不動明王(狩野芳崖筆)

新知識によつて、彼は自分の創作に對する理論上の根據を擱んだ。「日本の社會が理解してくれなければ、世界を相手にして描くまでのことだ。」彼はさうまで考へるやうにな

理論上の根據を擱んだ。

ボストン
米國東海岸北部の都會。學藝の中心地で、「アメリカのアゼンズ」と呼ばれる。

つた。

今、上野の東京美術學校第一の校寶とされてゐる「慈母觀音」ボストン博物館に陳列されて日本美術のために氣を吐きつゝある「鍾馗捉鬼の圖」、その他彼の名を不朽にした幾枚かの大製作は、それから僅か四年、たゞ四年しか生きることの出来なかつた彼の最晩年の極めて短い期間に描かれたものである。

(『明治美談』に據る。)

五夜叉王

岡本綺堂

岡本綺堂
小説家、劇作家
名は敬二
東京の人
明治五年生

登場人物

面教師 夜叉王
源左金吾 頼家
夜叉王の娘 桂

頼家

源頼朝の長子、
二代將軍。元久
元年（公四）七月
十八日弒せられ
た。年二十三。

修禪寺

眞言宗。空海大
師の開基とい
ふ。頼家、頼朝の
幽閉された寺。

同 楓

下田五郎景安

修禪寺の僧

時 元久元年七月十八日

所 伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜叉王の住
家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面な
どを懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切
りて、素焼の土瓶など掛けたり。庭の入口は竹にて編
みたる門、外には柳の大樹、そのうしろは畠を隔てて塔
の峰つゞきの山または丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間の家體は細工場にて、三方に
古りたる蒲簾を下せり。庭先には秋の草花咲けり。

娘楓門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一
人、燈籠を持ちて先に立ち、つゞいて源の頼家卿、二十三

歳後より下田五郎景安、十七八歳、頼家の太刀を捧げて
出づ。

僧 これく、將軍家のお微行ぢや。粗相があつてはなり
ませぬぞ。

楓はツと平伏す。頼家主從進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉 思ひも寄らぬお成として、何の設けもござりませぬが、ま
づあれへお通り下さりませ。

頼家は縁に腰打掛く。

夜叉 して、御用の趣は。

頼家 問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形
見に残さんと、さきに其方を召し出だし、頼家に似せた

何の設けもござ
りませぬ。

る面おもてを作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を経れども出來せず。幾度か延引を申し立てて、今まで打過ぎしは何たることぢや。

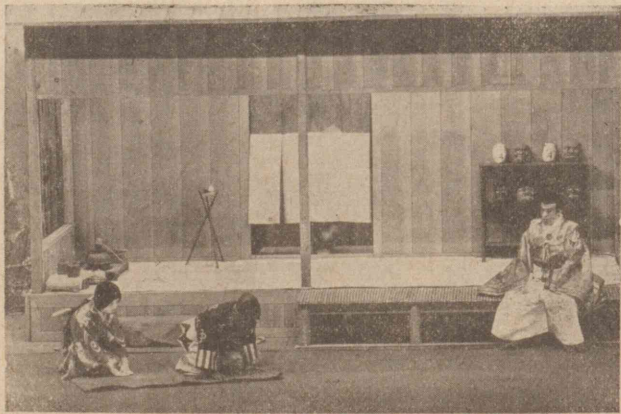
五郎 多寡が面一箇ひとつの細工、いかに丹精を凝らすとも百日とは費すまい。お細工仰せ付けられしは當春の初、その後己に半年をも過ぎたるに、未だ献上いたさぬとは餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上様の御機嫌散々ぢやぞ。

懈怠

頼家 予は生まれついでにの性急ぢや。いつまでも待てど暮せど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、この上は使など遣はすこと無用と、予が直々ちかぢかに催促に參つた。おの

職の名譽、身の面目。

夜又 御立腹恐れ入りましてござりまする。物體なくも征夷大將軍、源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽なまね、身の面目めんぼく、いかで等閑なびに存じませうや。御用承りて己に半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに、夜晝となく打ちましても、意に適ふ程ほどのもの一箇ひとつも無く、更に打替へ作り替へて、心ならずも延引に延引を重ねましたる次第、何れ何故に細工を怠り居るか。子細を言へ、子細を申せ。



(劇) 王 又 夜

とぞお察し下さりませ。
頼家 え、催促の都度に同じことを……。その申譯は聞き飽いたぞ。

五郎 この上は唯延引とのみでは相濟むまい。いつの頃までには必ず出來するか、豫め期日を定めてお詫を申せ。夜又 その期日は申し上げられませぬ。左に鑿を持ち、右に槌を持てば、面は容易く成るものと思し召すか。家を作り塔を組む番匠などとは事變りて、これは生無き粗木を削り、男女、天人、夜又、羅刹、ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打込む面作師。五體に漲る精力が、兩の腕に自ら湊まる時、我が魂魄は流るゝ如く彼に通ひて、始

これは生無き粗木を削り、男女、天人、夜又、羅刹、ありとあらゆる善惡邪正の魂魄を打込む面作師。

めて面も作られます。但し、その時は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、我ながら確とはわかりません。

僧 これ、夜又王殿。上様は御自身も仰せらるゝ如く、至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取留の無いことばかり申し上げてゐたら、御癩癖が愈募らう程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確とお返事を申すがよからうぞ。

夜又 ちやというて、出來ぬものはなう。
僧 なんの、こなたの腕で出來ぬことがあらう。面作師も

職人冥利。

京鎌倉までも聞
えた者。

多くある中で、伊豆の夜叉王といへば、京鎌倉までも聞
えた者ぢやに……。

夜叉 さあ、それ故に出来ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜
叉王といへば、人にも少しは知られたもの。たとひお
咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を世に残すのは
いかにも無念ぢや。

頼家 何、無念ぢやと……。さらばいかなる祟りを受けうと
も、早急には出来ぬといふか。

夜叉 恐れながら、早急には……。

頼家 む、おのれ覺悟せい。

癪癖募りし頼家は、五郎の捧げたる太刀を引つ取つて、あはや抜か

んとす。奥より桂走り出で、

桂 まあ、お待ち下さりませ。

頼家 え、退け、退け。

桂 まづお鎮まり下さりませ。面は唯今献上いたします
る。なう父様。

と顧みれども、夜叉王は黙して答へず。

五郎 何、面は既に出來して居るか。

頼家 え、己れ、前後不揃の事を申し立てて、予を欺かうでな。

桂 いえ、嘘偽りではござりませぬ。面は確かに出來
して居ります。これ父様。もうこの上は是非がご
ざんすまい。

前後不揃の事を
申し立てて、予
を欺かうでな。

お慈悲を願ふが上分別。

楓 ほんに然うぢや。昨夜漸く出来したといふ彼の面かほを、寧らそ献上けんじやうなされては……。

僧 それが可よい、それが可よい。こなたも凡夫ぢや。名も惜しからうが、命も惜しからう。出来した面があるならば、早う上様に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。夜又 命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事でない。黙つておるやれ。

僧 さりとて、これが見てゐられうか。さあ、娘御、その面を持つて来て、ともかくも御覽に入れたが可よいぞ。早う、早う。

楓 あい、あい。

心少しく解けたる體。

偽りならぬ證據。

楓 細工場へ走りて、木彫の假面めんを入れたる箱を持ち出づ。桂受取りて頼家の前に捧ぐ。頼家無言に桂の顔をうちまもる。心少しく解けたる體なり。

桂 偽りならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家 假面めんを取りて打眺め、思はず感歎の聲を擧げる。

頼家 おゝ、見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎 上様御顔に生寫しぢや。

頼家 むゝ。(と飽かず打ちまもる。僧はしたり顔に)

僧 さればこそ言はぬことか。それ程の物が出来してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。はゝゝゝ。

おめがね違ひ。

夜又(形を改めて) 何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、斯う相成つては致方もござりませぬ。方々にはその面を何と御覽なされます。

頼家 流石は夜又王、天晴れのものぢや。頼家も満足したぞ。

夜又 天晴れとの御賞美は憚ながらおめがね違ひ。それは夜又王が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。

五郎 面が死んで居るとは……。

夜又 年來數多打つたる面は、生けるが如しと人もいひ、我も許して居りましたが、不思議や、この度の面に限つて、幾度打直しても生きたる色無く、魂魄も無き死人の相……

… それは世にある人の面ではござりませぬ。死人の面でござりまする。

五郎 そちはさやうに申しても、我等の眼には矢張り生きたる人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜又 いや、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。しかも眼には恨を宿し、何者をか呪ふが如き、怨靈怪異なんどの類……。

僧 あ、これ、そのやうな不吉な事は申さぬものぢや。御意に適へば、それで重疊 有難く御禮を申されい。

頼家 む、とにもかくにもこの面は頼家の意に適うた。持ち歸るぞ。

怨靈怪異。

重疊。

夜又 たつて御所望とござりますれば……。

頼家 おゝ所望ぢや。それ。

頼家 願にて示せば、桂心得て假面かめんを箱に納む。やがて頼家立ち、五郎も立つ。桂箱をさゝげて庭におり立つ。

僧 やれ〜、これで愚僧もまづ安堵いたした。夜又王殿、

明日あすまた逢ひませうぞ。

頼家 行きかゝりて物に躓く

頼家 おゝ、いつの間にか暗うなつた。

僧 進み出でて桂に燈籠を渡す。桂假面の箱を僧に渡し、燈籠を持つて案内す。夜又王はじつと思案の體なり。

楓 父様ちちさまお見送を……。

夜又王 始めて心づきたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎 そちへの御褒美は、改めて沙汰するぞ。

頼家 等相前後して出で行く。夜又王起ち上つて、默然としてゐたりしが、やがてつか〜と縁に上り、細工場より槌を持ち來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓驚き取絶りて、

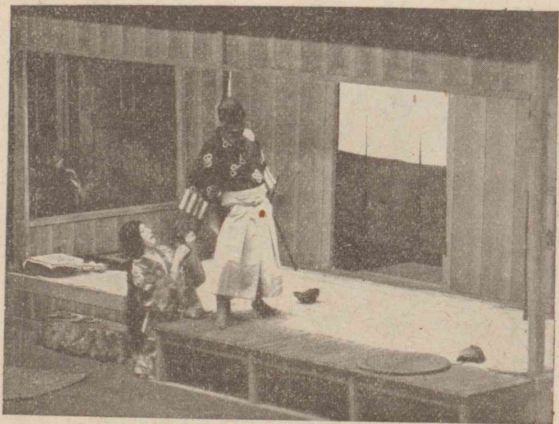
楓 あゝこれ、何なにとなさる。お前は

物に狂はれたか。

夜又 切羽詰りて是非に及ばず、拙き

細工を献上したは、悔んでも返らぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜又王が

是非に及ばず。



(劇) 王 又 茂

一生の名折、末代の恥辱。

作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑ひを貽さば、一生の名折、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も今日限り、再び槌は持つまいぞ。

楓

さりとは短氣でござりませう。如何なる名人、上手でも、細工の出來不出來は時の運。一生の中に一度でも天晴れ名作が出來ようならば、それが名人ではござりませぬか。

夜叉

む。

楓

拙い細工を世に出したを、さほどに無念と思し召さば、これからいよく精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を雪いで下さりませ。

と縋りて泣く。夜叉王答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。日暮れて
笛の聲遠く聞ゆ。
〔修禪寺物語〕

六文字

木枝増一

木枝増一
國語學者、奈良女子高等師範學校教授
京都府の人
明治二十四年生

文字は言語をうつす形體的の記號である。我々が心に思ふことを他人に傳へるのには言語で十分であるが、遠隔の地に傳へるとか、永久に保存するとかのためには、文字の力に依らなければならぬ。文字は言語の缺點を補ふために作られたものであつて、その人類の文化に與へた貢獻は實に偉大なものである。世界の文字の系統には埃及文字と支那文字との二大別があり、我々が平素使用してゐる

漢字

文字は、支那文字の系統に屬する漢字と國字と假名との三種類である。

漢字は支那で作られたもので、黃帝の時代に蒼頡さうぎつといふ者が鳥の足跡から考案したと傳へられてゐる。我が國に漢字が傳來したのは、應神天皇の御代だと記録にはあるが、事實はもつと以前から傳へられてゐたものであらう。

漢字の最初は簡単な繪畫に近いものであつた。

☉(日) 〽(月) 山(山) 水(水)

手(手) 魚(魚) 竹(竹) 木(木)

右の如く物の形を象どつて作つたもので、之を象形文字といふ。形をまねることの出来ないものは、象形文字を本

象形

指事

としてこれに線や點を加減して工夫をこらした。

二(上) 一(下) 末(末) 本(本)

この様にして作つた文字を指事文字といふ。以上の象形と指事とは漢字の作り方の基礎で、之を更に組み合わせることによつて多くの文字が作られるのである。日と月とを組み合わせせて明の字とし、木を二つ組み合わせせて林の字を作る。人と言とで信の字とし、口と鳥とで鳴の字とするやうに、文字の意味を合はせて新しい字としたものを會意文字といふ。又文字を組み合わせせる時に一方からは意味をとり、一方からは音をとる場合もある。江、紅の字に於ける水、糸は意味を表し、工は音を表してゐる。鷄、鶴、鳩など

會意

諧聲

轉注
假借

皆これであつて、このやうにして出來た文字を諧聲又は形聲文字といふ。この方法で出來た文字は漢字の中でその數が非常に多い。以上は漢字の構造法であるが、この外に、使用法の上に轉注、假借の二法がある。この六つを合せて漢字の六書りくじよと言つてゐる。

漢字の總數は約五萬と言はれてゐるが、日本で現在使用してゐるものは約五千位だと言ふ。けれども我々はその全部の漢字を知つてゐる譯ではないから、知らない漢字にぶつかつた時には辭書を引かなければならない。辭書を引くにはその文字の畫と部首とを豫め知つて置く必要がある。

點、畫

偏、旁、冠、
脚、繞、垂、
講

漢字はすべて點(丶)と畫(一、丨、ノ、へ、し、丨等)とから出來て居る。隨つて、すべての漢字はその點と畫との數を數へることが出来る。知といふ漢字は八畫であり、識といふ漢字は十九畫である。

漢字はその構成上、偏へん、旁ぱう、冠かん、脚きゃく、繞ねら、垂たれ、構かまの七つの部分から出來てゐる。偏は漢字の左の部分、旁は右の部分、冠は上の部分、脚は下の部分、繞は繞めぐつてゐる部分、垂は垂れてゐる部分、構は圍んでゐる部分をいふ。次にその例を示して見る。

坂・城・垣……………土
針・鈴・銀……………金 偏

封・射・對……………寸
功・助・動……………力 旁

音訓

守官家……………	冠	照煮熱……………	脚
雪雷霞……………	雨	盆盡盤……………	皿
延建廻……………	瓦	床店座……………	广
近追道……………	迂	病疲痛……………	疒
國圍圖……………	口		垂
閉開間……………	門		

右の如き部分は辭書によつて漢字を引く時の大切な着眼點であつて、之を部首といふ。部首によつてその漢字が如何なる部に屬するかを知り、次に部首を除いた残りの畫數を數へて、その字を辭書の中から探し出すのである。漢字には音と訓とがある。音は字音のこと、漢字本來

音

の讀み方であり、訓は字訓のこと、その字の示す國語の意味に従つた讀み方である。草木をサウモクといへば音で讀んだのであり、クサキといへば訓で讀んだのである。漢字の音には吳音、漢音、唐音、現代支那音の四種類がある。京都行狀の京、行の類は吳音であり、京師、行爲の京、行は漢音であり、南京、行宮の京、行は唐音である。上海漢口、芝罘などはいづれも現代の支那音である。吳音は我が國に最も早く傳つた音で、佛敎に關する語に多く用ゐられてゐる。漢音は遣唐使などによつて傳へられた音で、唐の文化と共に盛に我が國に用ゐられ、漢字の音の中では最も多く用ゐられてゐる。唐音は宋以後僧侶などによつて傳へられた音

で、あまり多くは用ゐられない。現代支那音は地名その他特殊なものにだけ用ゐられてゐる。又同じ漢音でも善惡、憎惡、音樂、苦樂の惡、樂の文字のやうに、意味を異にするに従つて音の違ふこともある。

漢字の訓は漢字の持つてゐる意味に相當する國語を宛てたものである。その宛て方は中々複雑である。山海、鳥獸、花、空のやうなものあれば、今日、明日、叔父、叔母、海苔、香魚のやうなものもある。又隧道、燐寸、煙草、莫大、小、襯衣等のやうに西洋語をあてたものもあり、七夕、流石、五月蠅等のやうに漢字と訓との關係のすぐには分らないものもある。又、同字に對して多くの異訓のある場合があり、多くの異字に對して

訓

湯桶讀
重箱讀

國字

假名

同訓のある場合があつて、漢字の文字と訓との關係は複雑である。

漢語の熟字は、音讀する時は二字とも音讀し、訓讀する時は二字とも訓讀するのが常であるが、小僧、野宿、敷布、團子、役場のやうに一方を訓讀し一方を音讀するものもある。小僧、野宿、敷布のやうなものを湯桶讀と言ひ、團子、役場のやうなものを重箱讀と言つてゐる。

國字は漢字の構成法にならつて我が國で作つたもので、多くは會意文字である。辻、峠、袷、島、凧、凧、俵、鯛、柿の如きものや、哩、吋、糲、耗、疍などはみなこれである。

假名は漢字の表してゐる意味を捨てて、その音だけを借

りて國語を書き記したものである。假名の最初は萬葉假名であつて、阿伊宇江於や、あり(有)なし(無)に蟻、梨の字を用ゐる如きがこれである。今の平假名、片假名はこれから發達したものであつて、平假名は草書の體を簡單にしたもの、片假名は偏、旁、冠など字畫の一部をとつて作つたものである。假名と漢字との相違は、漢字が言語の發音と意味とを表すに對して、假名は言語の發音だけを示して決して意味を表さない點にある。この點で假名はローマ字と似た性質をもつてゐて、文字としては進歩したものである。平假名は空海、片假名は吉備眞備によつて作られたといふ言傳へがあるが決して一人の手に成つたものではなく、平安朝の初

空海
弘法大師
承和二年(四九五)
寂、年六十二
吉備眞備
寶龜六年(四四五)
薨、年八十三

期頃までに誰が創めたといふ事なしに自然に發達したものであらう。漢字から假名を發明工夫したのは、ひとへに日本人の模倣性と獨創性との調和によるもので、世界に誇るに足る事實である。

以上の如く我が國の文字は種類が多く、用法も亦中々複雑であるから、これを改良しようといふ意見も起つて來るのであるが、長い歴史的の發展を経て來たものであるからさう急には改變も出來ない。随つて、我々はその文字の本質をよく知つてこれを正しく活用することに努力すべきである。

市島春城

隨筆家

名は謙吉

新潟の人

萬延元年生

清淨で、圓滿で、繁榮する家庭。

七 家庭は合作の藝術品

市島春城

家庭は、人めいゝの安全地帯であり、自由郷であり、また一つの小さな國でもある。清淨で、圓滿で、繁榮する家庭は、何ものにも代へがたい優れた藝術品である。この藝術は、一朝一夕にして成るものでなく、一人二人の力で成るものでもなく、老幼男女相倚り相助くるたゆみのない努力によつて成るところの合作の藝術である。随つてこの藝術を作ることは他の藝術以上にむづかしいのである。

畫を描くに、合作といふことがある。例へば、一人が山を

手法、

全局、

家庭は共同精神、共同動作の必要な綜合藝術である。

紙一紙、底

描き、一人が水を描き、一人が樹を描いて、それで纏まつた一幅を成すのであるが、易いやうでそれが案外にむづかしい。合作者の意氣がしつくり投合し、手法がぴつたり合はねば畫の全局に破綻が來るからである。破綻が來ては、その畫の部分々々にいかにすぐれたところがあつても、それは失敗の作だからである。

畫は本來一人で描くべきものであるが、家庭はどこまでも合作でなければ成立たない藝術である。共同精神、共同動作の必要な綜合藝術である。然らばその大切な共同精神、共同動作の根柢になるものは何か。それは親和である。よく親子は水入らずとか、養子や嫁は他人だなどといふ

共に憂へ 共に喜び 共に生産し 共に消費して満足する。

家庭の主権者。

人があるが、もと／＼家庭の成立ちは他人同志なのである。まづ今こそ舅姑の立場にある両親でも、初は恐らく他人同志であつたであらう。それが年経る中に全く一つのものになり切つて、共に憂へ、共に喜び、共に生産し、共に消費して満足してゐるのではないか。あかの他人が水入らずになる、そこに家庭の生命があり、面白味があるのである。娘に迎へた婿、息子にとつた嫁、それらの若い人たちも、やがてはさうなるべき後進の人々である。初は他人でも、我が家庭の人となつた以上、もはや他人ではないのである。のみならず將來は、その家庭の主権者となり、主婦となるべき大切な人々なのである。我々は家庭を重んじ、愛するこ

家庭を繁榮させるのに一番大切なのは、良い子供を生み育てるといふことである。

子供は家庭を安固に支持する支柱である。

とが強ければ強いだけ、深く思をこゝに致さねばならぬ。家庭を繁榮させるのに一番大切なのは、良い子供を生み育てるといふことである。夫婦が始終喧嘩をしてゐては良い子が出来ない。風波の多い家庭に、立派な子供の育つ道理がないからである。子供は家庭を安固に支持する支柱である。良い子供をまうけるためにも家庭は圓滿でなければならぬ。

科學者のよくいふことだが、物が安定を保つには三點を要する。一本の棒を地上に立てても、それは仆れがちである。二本立てて互に相倚らしめると、いくらか安定を得るが、まだ鞏固とはいへない。三本立ててお互に相倚らしむ

家庭の三點。

るに至つて、始めて、風が吹いても、手で打つても、めつたに仆れることのない安定を得るのである。

父と母と子、これは家庭の三點である。祖父母と父母と子供、これも家庭の三點である。父母と夫と妻、これも同じく三點である。夫と妻とそのいづれかの兄弟姉妹、これも一種の三點と視られるであらう。しかしてこれら三點をなす三者が互に相倚り相扶けるならば、家庭の基礎がこの上ない安定を得ることはいふまでもないのである。

むつかしい藝術であり、廣い世間のことでもあるから、この家庭といふ藝術品の中には、少からず拙作もあれば駄作も交つてゐるであらうが、その中に於て、數は少くともすぐ

家庭といふ藝術品の中の拙作と駄作と傑作。

れた傑作を見るのは、見る眼に美しく、この上もない愉快である。殊にそれらの傑作が、全く一家の親和から生じてゐることを知り、その親和が、努力なくしては生まれられないものであることを思ふ時、私はさういふ藝術品に對して、心からの尊敬を捧げずにはゐられないのである。

八ミレ一の晩鐘 岩橋武夫

凡そ偉大なる藝術は、黄金によつてその價值を決し得るものではない。人類の至寶として不朽に傳へられてゐる作品は、事實多くは都會のいぶせき陋屋から、或は片田舎のむさくろしい隅々から、名もなき藝術家の心が神に通ふ眞

岩橋武夫

關西學院教授

大阪の人

明治三十一年生

隅一隅

眞摯な努力。

ミレー
(1814-75)

摯な努力によつて産み出されたものである。かのフラン
スの畫家ミレーの作品の如きは、その最もよき實例の一つ
である。

ミレーは若い時分に、パリで裸體畫を描いてゐた。もし
そのまゝの生涯をつゞけて行つたならば、彼はつひに後の
偉大なるミレーではなかつたであらうが、有難いのは天で
ある。

或日彼は妻と共にパリの街を歩いてゐた。そして或畫
商の飾窓を覗き込まうとして、ふと傍なる二人の男の立話
に耳をそばだてた。

一人の男が言つた。

「おい、この繪は誰が描いたんだ？」

他の男が答へた。

「ミレーといふ奴が描いたのさ。」

「はゝあ、この男も流行ハヤの俗畫
ミを描かんと、食つて行けない連
レ中の一人と見えるなあ。」



くすと笑つた。無論當のミレーがそこにあると知る筈は
ないが、ミレー自身にとつては、これが實に大きな反省の鐵

大きな反省の鐵
槌。

鐵(鉄)

全身の血が一時に凍つてしまふ。

槌であつた。

彼は全身の血が一時に凍つてしまふやうに感じて、思はず手を握りしめた。彼は直ぐに妻を促して公園へ飛び込んだ。そして溜息をついて言つた。

「今の話を聞いたか。自分は残念ながら、たゞの裸體畫家としか見られてゐない。しかしそれも無理がない。自分分はたゞパンのために賣れ足の早い繪を描いて來たのだからな。かうなると、お母さんの言つたことが、しみじみ想ひ出されて來る。お母さんが、いつか言つたよ。」お前は何をして、もよいが、たゞ神様の榮光を汚さないやうな仕事をして、おくれよ」つてね。自分は明日から裸體畫

賣れ足の早い繪を描いて來た。

苦しみの道連れにして、墓場まで引つぱつて行くことが出來ない。

筆を描くことを止める。止めれば無論すぐに生活に窮するが、それは覺悟の前だ。但しお前を貧乏の道連れにするのは忍びない。お前はまだ若い、さうして美しい。このまゝ別れようではないか。自分には、自分の苦しみの道連れにして、お前を墓場まで引つぱつて行くことが出來ないからね。」

「それは間違つてゐます！」ミレーの妻はきつぱりと言つた。「どんな暮しをしても夫婦は夫婦です。それに、さういふえらい決心をされたあなたを、私がどうして捨てられませう。私は永久にあなたの側にて、あなたの妻であることを誇りたいと思ひます。」

提堤

姓一性

かくして、二人は固い誓を結んだ。ミレーの喜はいふまでもない。彼はやがて一つの提案をした。

「三日の中に自分はパリを去らうと思ふが、お前は若い身空で都を見捨てるのは辛からう。自分の行く所は田舎だ。自分を待つものは勞働だ。そして自分は百姓になるのだ。自分と一緒に田舎に行く決心がお前にあるか。」

健氣な妻は直ちにこれにも同意した。かくして三日の後、ミレー夫妻は、明るい街、歌の街、享樂の街から永遠に遠ざかつた。

一介の水吞百姓。

それからミレーは、一介の水吞百姓となつて働いた。繪筆を握つた彼の優しい手に、鋤が持たれ、鋤が握られた。彼

この生活の眞只中から産聲を擧げたのが、あの有名な晩鐘である。

燃え。

會心の作。

の妻も同じく一介の水吞百姓の妻として働いた。そして二人は多くの子女に取巻かれて、好き父となり、好き母となつた。この生活の眞唯中から産聲を擧げたのが、あの有名な「晩鐘」である。

その頃ミレーの家は毎日の糧にも事缺くやうな有様であつた。ストーヴに入れる薪を買ふ金のないことすらも、時にはあつた。しかしミレーの魂は歡喜に燃えて躍つてゐた。彼が會心の作はこの間に生まれたのである。我々は、あの「晩鐘」の畫を三色版で餘りに多く見過ぎてゐるので、あの和やかな、宗教味の多い畫の描かれた背景に、このやうな血と汗の滲んだ生活のあつたことを知らない。

ヘンリー・ヴン
ダイク
(1882-1933)

アメリカの批評家、ヘンリー・ヴンダイクは「晩鐘」を評して、「こゝに三つの偉大が象徴されてある。一つは労働、一つは愛、そしてもう一つは信仰である。」と言つた。まさしくその通りである。あの畫の題材は、夫婦の百姓の夕の祈である。彼等は今しも車の傍に農具を休め、帽子を脱いで頭を垂れてゐる。彼等の立つ場所は野中の畠で、見渡す限りが廣い田園である。こゝに労働がある。愛がある。そしてその愛は清い、淨い夫婦の愛である。



(筆 - レミ) ひ 拾 穂 落

ある。その上に更に信仰がある。彼等はたゞ地上を見て頭を垂れてゐるのではない。莊嚴な鐘の音に聽き入りながら、敬虔な頭を垂れてゐるのである。尙ほ注意して御覽なさい。今や西の空には僅かの餘光を残して、夕陽が沈まうとしてゐるではないか。そしてその餘光が森蔭に頭を擡げた教會の塔に美しく映えてゐるではないか。田園一帯が夕を告ぐるこの教會の鐘の音に包まれて、それを合圖に、清淨な心の男女が聖き労働を終へた一日を感謝してゐるではないか。かやうに労働と愛と信仰とを一つの畫面に渾然と表現したこの「晩鐘」こそ、まことに神と人との前に成された最も偉大なる藝術といふべきで、それが久しく世

聖き労働。

渾然。

多端匆忙。
清涼劑。

に知られずして貧しい田舎家に埋れてゐたといふのは、いひ知らぬ哀れのこもつた話である、私は思ふ。
ミレーが今一つの名畫に「落穂拾ひ」がある。これも農民生活のすばらしい表現であるが、前なる「晚鐘」と相伴なつて、多端匆忙なる現代人の生活を美化しつゝ、精神的の清涼劑となつてくれるのは感謝すべきことである。

徳富健次郎
小説家蘆花と號
した

熊本縣の人
昭和二年歿
年六十

仰いで碧空を望
むべく、歩いて
永遠を思ふに足
る。

宇宙の富は殆ど
三坪の庭に溢る
ゝを覺ゆ。

九 我が家の富

徳富健次郎

家は十坪に過ぎず。庭は唯三坪。誰か言ふ、狭くして且陋なり」と。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狭しと雖も、仰いで碧空を望むべく、歩いて永遠を思ふに足る。

神の月日は此所にも照れば、四季も來り、風、雨、雪、霰かはるがはる至りて興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

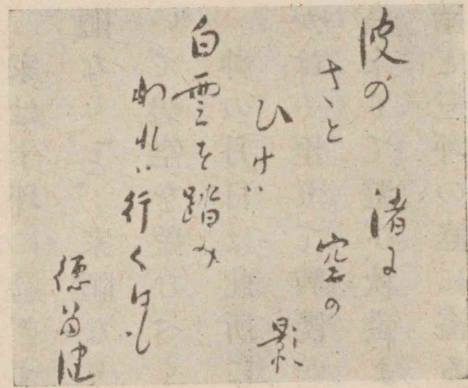
庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開きて樹に滿つ。風ある日には、うすく霞める空より、白き

須臾
紅雨霏々、白雪
紛々見るがうち
に滿庭花の衣を
著く。

波のさとひけば
渚に空の影白雲
を踏みわれば行
くはも
徳富 健

くちなし(山楯
梔子)

花ちらちらと舞ひて、一庭須臾に雪を散す。
隣家に花樹多し。 風に隨ひて飛花我が庭に落つ。 紅雨



徳富 健 次郎 筆蹟

霏々、白雪紛々、見るがうちに滿庭花の衣を著く。 子細に見れば桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。
庭隅に一株のくちなしあり。 五月闇うつたうしき頃、香しき白花を開く。 主も妻も無口なれば、この花

の我が家に開くは宜なりけり。
老李の背後に一株の梧あり。 碧幹亭々として少しのゆ

琥珀玉滾々と地に落つ。

燃え。
植ゑ。

梁田蛻巖
明石藩の儒者。
寶曆七年(四七
年)歿、年八十六。
獨り憐む云々

「九月九日」と題
する詩
琪樹連、雲、秋色
飛、獨、憐、菊、近、三
荆、屏、登、高、能
賦、今、誰、是、海、内、
文章落、布衣、

がみなく、我が如く直かれと教ふるに似たり。 梧葉と手水鉢の側なる八手とは葉闊うして、我が家の雨聲を多からしむ。 李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

つくつく ぼふしの聲に世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺許の楓も紅に燃えいで、唯一株、前の家主の植ゑ遺したる黄菊も咲き出づ。 名苑の花美しと言ふとも、秋の哀れ閑寂の趣は、却つて我が庭の一枝にあるべし。 蛻巖の翁ならば、獨り憐む細菊荆扉に近きを」とや吟ぜん。 恥づらくは海内の文章布衣に落つ。」と唱ふべき身にあらざる事を。 屋後に一株の銀杏あり。 秋深くして滿樹金よりも黄な

翻

り。木枯の風起れば、その葉翩々として翻り落つ。半夜夢
覺めて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色
となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、所として落葉ならざるは
なく、紅葉さへ落添ひて、寸金と人は言ふなる錦を、我は庭に
敷詰めぬ。木の葉落盡しては流石に寂しげなれど、日影月
影愈多くなりて、空を見、星を見るに障少きは嬉し。

〔自然と人生〕

落合直文
國文學者

號は菘廼舍

仙臺の人

明治三十六年三

委三歿、年四十

三

菘(養)

一〇 菘 蟲 に

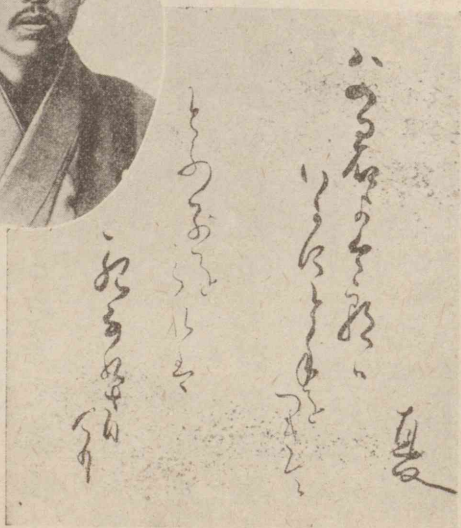
落 合 直 文

菘蟲にわれあらねども秋風になき父をのみこひわ
たるかな

母の背にむかしながめしわが身とは知るや知らず
やふるさとの月

世に媚びぬこころも見
えてなかなかに瘦せた
る菊のおもしろきかな

父と母といづ
れかよきと子
に問へば父よ
といひて母を



落合直文の筆蹟

直文

父君よ今朝はい
かにと手をつき
てとふ子を見れ
ば死なれざりけ
り

かへりみぬ

緋緘の鎧をつけて太刀佩きて見ばやとぞおもふ山
櫻花

霜やけの小さき手して蜜柑むくわが子しのぼゆ風
の寒きに

片假名のかたなりながら文かきて子はおこせたり
年のはじめに(安房にて)

片假名のかたなりながら

二つなきものなりながら事しあれば千々に碎けて
物をこそおもへ(心)

一一 備後 疊

橘 南 谿

橘 南谿
醫者、旅行家
伊勢の人
宮川氏、名は春
暉、字は惠風、
梅仙とも號す
文化二年(西曆五
十三年)歿、年五十二
野服を着し、方
頂巾を戴きし。
老い
…にや
御人や

備後國を通りし時、百姓と見えし年老いし男二人、ふと道
連れになり、山の名里の風俗など尋ね問ひて行きたりしに、
我が野服のびを着し、方頂布のうみを戴きしを怪しみて、「いかなる人に
て、いづくよりいづくへ行き給ふにや」と問ふに、「都方の醫者
なるが、醫術修行のために諸國を遊歴するなり」と答へしか
ば、「偕も頼もしき御人や。我等が住む里は向うの山の奥な
るが、親しき家の女房に奇妙なる難病ありて、はや二年ふたとせにな

露ばかりの驗も
なく、

命さへ、

尾の道
廣島縣尾道市
備後第一の港。
二三里
一里は約四キロ。

給はらばや、

れるが、近きあたりに住み候へば、聞くもいぶせく、その家にも
てもいろく、と醫療盡くさざる事もなければ、露ばかりの
驗もなく、今ははや命さへ危く見え候ひぬ。かく山深き片
田舎にて、名高き醫師も候はず、あはれ都近くもあるならば
など、親類の者は歎き居り候ひぬ。今日は計らずも京都の
御醫と承り候へば、親類どもが常々の詞も思ひ出し候ひて、
あはれにも候へば、何とぞ脈ばかりにても取らせ給ひて、彼
等が心をも慰め給はらばや」と、誠の心言葉に出でて、また餘
儀もなく見えたりしかば、余もこの道修業のことなれば、「い
と易き事なり」とうけがひて、彼の者どものしりへに従ひて、
尾の道の二三里ばかりこなたより右の方に分け入る。

餓ゑ。
程も知れぬいた
づら事。

あすはまた此里
だにもしのばれ
むけふはきのふ
のゆく末のたび
春暉

とある山あひの
いと淋しき里

しかぐの由。

鹿狼の通ふ如き細道を、谷に下り峯に上りて、行けども行
けども程遠きに、腹饑る足疲るれば、僕腹立て、程も知れぬい
たづら事とつぶやく。とかうなだめて行く程に、やうく

詠
あすはまた此里
だにもしのばれ
むけふはきのふ
のゆく末のたび
春暉

颯筆 谿南橋

に到り着きぬ。とある山あひのいと淋しき里にて、本郷と
いふ所なり。

その家に入れば、病者は五十ばかりなる女にて、その夫を
六兵衛といふ。案内の者しかぐの由をいへば、家内皆驚
き悦び、「去年の冬より、難治の病に罹りしが、次第に重りて、果

坐座

は腹裂くる心地して、苦しみ譬へむかたなし。日々月々に病つものり、春の頃よりは一しほにて、横に臥せば下腹一しほ裂くるが如く、立てば苦しく、坐すれば堪へ難し。それゆゑ晝夜たゞ火燵のやぐらに兩手をつかへ、立ちながらうつむきてゐることのみ、少し心やすらかなるやうなれば、春以來は片時かたときも坐せず、臥せず、たゞ晝夜食事にも眠るにもこの通りなり。その苦しみなかく、いふも愚かなり。近き頃は殊にあしければ、命の限りも遠からじと、一日も早く臨終をのみ待ち侍るなり。命のことは助かるべくも思ひ侍らねど、都の人と承ればゆかしくこそ候へ。何とぞ一日なりとも、この苦しみを助け給はりて、横に臥して安らかに臨終を

なかく、いふも愚かなり。

ゆかしくこそ候へ。

給はば給へば

来る來たる

苦しみの聲隣を動かし。

三原
廣島縣御調郡、
淺野氏の國番城
のあつた所。

得しめ給はば、上も無き御惠と涙を流せるさま、げに見るさへあはれなり。晝夜立ちてうつぶし居れば、足は柱の如く、腫氣しゅきありて、顔もまた眼ぶちはれ、額も浮きて、生きたる人の如くにもあらず。一しきり腹はり來たる時は、苦しみの聲隣を動かし、聞く者すら堪へかねたり。病體はまことにかくの如く危く甚だしけれど、その脈に見どころありければ、いそぎ薬を與へ、尙ほ薬湯を以て腰より漬ひたし、種々の療術を用ゐしかば、やがて通利出で來て、始めて横さまになることを得たり。尙ほしなぐの療治を加へ、この以後に用ゐる薬方を委しく書き記し、用ゐる方などまでもくはしく傳へ置きて、その家を辭して、數里の深山をわけ出でて、三原の城下

こそ……ならぬ

に着きぬ。

三原にてこの物語をせしに、諸も危き事なりき。御心に誠ありぬればこそ佛神の助もありて、まことの事に逢ひ給ふならぬ。かくの如き事は、多くは盜賊のいつはる事にて、旅する人を人なき深山に連れ行き、さし殺して金銀衣類を奪ふこと珍らしからず。この後は必ず疎忽の振舞し給ふべからず。』といひけるにぞ、始めて心づきて、恙なかりし事の嬉しかりき。

疎忽の振舞。

赴趣

それより諸國をめぐり、二年を過ぎて京に歸りゐたりしに、或日六條の旅宿のあるじ訪ね來り、「一兩年以前九州へ赴き給ひし御醫者はこなたなりや。」と問ふ。「いかなる用ぞ。」と

手がかりもなき尋ねやう。

聞けば、備後國より六兵衛といふ百姓一人のぼり來り、下に市の字の附きたる御醫師を聞き及ばずや。何とぞ尋ねくれよ。去々年しかかゝの事にて高恩にあひぬれば、御禮のために來りたり。その御名は聞かざりしかども、荷物の下げ札に市の字を見及びたりといふ。手がかりもなき尋ねやうかなと存じ候へども、その志の殊勝にも候へば、まづ試みに標札を見めぐりて、市の字を見當り候へば、おたづね申すなり。』といふにぞ、その事あり。』といへば、則ち歸り



備後表材(料)の栽培

不思議の御縁。

弘法大師

空海。眞言宗の開祖。一代の信望を聚めた高僧で、詩文書畫をも能くした。承和二年(四九五)寂、年六十三。

東寺

京都市下京區にある眞言宗東寺派本山。延暦十五年(四九五)建立。嵯峨天皇の時空海に賜ふ。本尊仁王護國は空海の作。

て、その次の日、かの六兵衛同道して來りつゝ、備後疊を自ら持ちて禮物とし、さても過ぎし年は不思議の御縁にて、妻なる者御療治に逢ひ、命は無きものと覺悟致し居り候ひしを、その日より驗しるしを得、仰せ置かれし日限の如くに、かゝる難病平癒して、再び常體つねたいの人となれること、殊に近所の者の行き逢ひより始りて、御名さへ承らず候へば、弘法大師の來らせ給ふなりとのみ、一村の評判にこそ致し候へ。京を尋ねたりとて逢ひ奉るべしとは圖らず候へども、命助かりし御高恩、一言の御禮も申さざる心の中も安からず、もし逢ひ奉る事なくは、東寺にても參り候うて、弘法大師様へ御禮申し歸るべしと、存じ極めて參り候ひしなり。まづは尋ね當りて

邊土の民の篤實なること、感ずるにも猶ほ餘りあり。

北原白秋

詩人。名は隆吉。福岡縣の人。明治十八年生。

日頃の本望にかなひ候なり。とて、眞實顔色に表れたり。予も嬉しくて、しばしもてなし慰めて歸しやりぬ。都近くの者ならましかば、百里に餘れる海山をいかではるく尋ね來るべき。邊土の民の篤實なること、感ずるにも猶ほ餘りあり。

〔西遊記〕

一二 作歌と修養

北原白秋

その道に入るなら、その道のことを何よりも尊いものにもし、修業もし、教へても貫ひ、自分から深く愛いとしみもし、大切無ければ、たゞの遊び事になつてしまふ。歌を崇めること

は自分を崇めることで、歌を弄ぶことは自分を弄ぶことになる。つまりは先づ歌を作るより人を作ることである。歌が詠める程の心を磨きあげることである。

私がひと夏、葛飾の眞間の龜井坊といふ廢れた古寺に、わび住まひしてゐた時のことである。或闇の夜、ふと籬の外に出て見ると、廢れた田圃のほとりの八つ手や、小竹や、葛の葉の繁みに思ひがけなく螢がちら／＼してゐた。うれしいと思つたので、出て見ないか。おい、螢があるよ。」と、内の方へ聲をかけた。「あら」と、妻の方でも驚いた聲を立てたが、そそくさとはしり出して來たものだ。手には圓い白いもの

拍
柏

を持つてゐる。團扇である。私は驚いて、「その團扇はどうする。」と、聲に出したが、それがやゝ強かつたか、妻もびくりとしたけはひで、團扇をうしろにかくした。かくした、そこまで氣がつけばありがたい。併し人からきかれて氣がつく位では何にもならない。私は妻に言つた。氣がついたらよいが、螢があると聞いたらたゞ飛んでくればよい。はつと思つた拍子に、直に團扇と感じて手にするといふ風では、あまりに心の修養が足りない。團扇は何のためか、むろん螢をはたき落す積りである。すると、螢はたく、團扇と三つ一緒になつて、はつと思つたのである。ことに螢に團扇は昔からのつきもので、提灯の繪にも商店の團扇繪にも、ざ

らにある。第一に古くさいではないか。螢と聞いて、直に捕るといふ心を起すのも淺はかである。私ならたゞ飛んで出る。見ようと思ふばかりで出る。それから綺麗だとか、悲しいとか、寂しいとか、哀れだとか、色や光や物かげのさま／＼をもしみ／＼と見て感ずる。それはその人の心の高下にもより、悲しみの深さ淺さ、趣味や學問の廣さ狭さにもよる。色々に見える。それから歌にもなれば、詩にも繪にもなり、言葉にもなる。

何事も平常の心がけしだいである。修業しだいである。平常心を尊く磨いて置くことである。而も素直に鮮かに心から驚くことである。

ある歌自慢の人が、眞間にたづねて來て、私に歌を見てくれと言つた。

そこで、まあ散歩でもしてみようと、一緒に、外に連れ出した。まだ赤い夕焼が西の空には残つてゐた。眞間の小川の土手の上を歩いてゐると、ふとその人がしやがんで小石を拾つた。

其處には、鮮かな裏白の葉の河楊が水の面に揺れてゐた。其の撓たかんで揺れうごいてゐる。一つの枝には、まだ小さな燕の子が一羽止つてゐた。又一羽來た。枝はいよく揺れる。枝の先は水へついて波を立ててゐる。燕の子達は、紅

たわむ

ついで

い頬を揃へて、さもく、恐ろしさうに啼きたてる。又一羽止まると枝はいよく、揺れ出した。ともすると滑り落ちさうになるので、今は必死となつてすがりついてゐる。そのつやく、した黒い羽、いたいけな啼き聲。それだけでも可愛い、のにも、また一羽、羽たゝいて、つい近く迄やつてくるが、枝の上の燕の子はそれを見て、慌てて、いけない、と啼く。これ以上止つては、枝がすつかり水につかつて了ふのである。空の一羽は、止るには止られず、寂しさうに啼きながら翔つては、近より、近よつては、また翔り出す。

その燕に向つて小石を投げたのである。

私ははつとしたが、それでも黙つてゐた。寂しい氣持で

微笑みながら、私はまた何氣なく歩みを續けた。さうして、あるところまでその人を送つて行つてから、左様なら、またお出でなさい。」と、別れの握手をした。それで歌はたうとう見ずじまひである。それはその一事で、その人の人柄がまだできてゐないといふことが、はつきりと私にわかつて了つたからである。

〔洗心雑話〕

一三 橘 媛

速風が速風を追うて、船を波頭に打ちつけながら吹き荒れた。その度ごとに、船が木の葉のやうに揺れては、波頭から波の底へ、打下される。

命 日本武尊。

已一已、已
たふれ
あられ

命の御船は己に荒れ狂ふ浪の真中に漂つてゐた。勇猛な益荒男達もこの自然の暴力の前に、顔を掩うて倒れてゐた。海に慣れた水夫すら茫然としてせん術を知らなかつた。命はじつと空の一角を睨んで立つてゐられたが、怖を知らぬ御眼差にも、いつしか曇の影が見えて來た。

のみならず頭上
からまで、齒を
むいてのしかゝ
る白浪の脅威
に。
おびえ。

橘媛をめぐる侍女達の顔には、もう生きた色がない。前から後から、左右からのみならず頭上からまで、齒をむいてのしかゝる白浪の脅威に、おびえては伏しまろび泣き叫ぶ。「取りみだすまいぞ。これしきのあらしに怖れて、見苦しい姿を見せまいぞ。」
橘媛は健氣にもかう言つて、泣き叫ぶ女達を制してゐら

その中に媛の顔
が物凄しい蒼みを
帯びて來た。同
時に媛の眼には
固い決心の影が
見えて來た。
怒一怒

さうぢや

たゞならぬ様
子。
さわぐ

れたが、その中に媛の顔が物凄しい蒼みを帯びて來た。同時に媛の眼には固い決心の影が見えて來た。「おゝ、これは海神の怒に觸れたとみえる。水夫舵取等の手練位で、どうならうものではない。殿下のお爲ぢや。お國の爲ぢや。この身を海神に捧げて、殿下の危難をお救ひ申さう。さうぢや、命を捨てるのは今である。さうぢや。」
橘媛はかう決心すると、よろめきながら命の御身近くへかけ寄せられた。命は、たゞならぬ媛の様子に屹となられて、「おゝ媛、危い。なぜ騒がれる。今少しの辛抱ぢや。」かう言ひながら、よろめきながら縋りつく媛の肩をしつ

抱へられ
言はれ
一期の願

かりと抱へられた。媛は命の御顔をじつと見て言はれた。
「命さま、一期の御願でござります。お暇を下さりませ。」
「何、一期の願ぢやと。そしてまた暇とは？」
「わたくしは殿下のお爲、お國の爲に命を捧げて、海神の怒をなだめたくござります。どうぞお許し下さりませ。」
「お、身の爲にといふか！ 國の爲に、健氣にも命を捨てるといふのか。」

悲痛の色

命の御顔には見る／＼悲痛の色が浮かんだ。命は暫く無言で、波をも風をも忘れたかの如く、じつと媛を抱きしめてゐられたが、やがて涙を拂つて、
「よう分つた。うれしく思ふぞ。帝のお國の爲ぢや。御

忍びかねるが、
とどめもえせぬ。ともかくも
心のまぢや。

一聯の勾玉

美しい哀調



橋媛の人の水

身の健氣な決心は、我が一軍の命を救ふであらう。忍びかねるが、とどめもえせぬ。ともかくも心のまぢや。」
橋媛の眼は喜に輝いた。やがて命の仰せによつて、荒波の上に菅疊八枚、皮疊八枚、純疊八枚が敷き重ねられる。

媛は最後の思出に、鏡の前で装を整へた。そして、底光を含んだ一聯の勾玉を眞白な頸に懸けると、侍女の一人が薄桃色の領巾を媛の肩に着せかけた。橋媛は、命の御姿をじつと見まもつてゐられたが、やがて美しい哀調がそ

の唇を漏れた。

眞嶺さし

相模の小野に

燃ゆる火の

火中に立ちて

問ひし君はも

あぶぐ

媛の姿は昔の、
皮の、繩の數々
の疊と共に、見
る見る浪間に沈
んで。

「空に冲つた富士を仰ぐ相模の小野の焼津が原で、燃えさ
かる火焰の中に立たせながら、御自身の危急をば顧みずに、
媛はどうした、橘媛はいかにせしとお尋ね下さつた君なる
ものを！」といふ意味で、かう歌つて限りなき思ひをこめた
名残の眼ざしを命の御顔にそゝがれたが、やがて紅の裳裾
が波間に翻ると、媛の姿は、昔の、皮の、繩の數々の疊と共に、見
る見る浪間に沈んで、永久に人々の眼から消えて行つた。

たふとい

「おゝ、媛君が、媛君さまが！」
「もう御見えにならない。もうあの荒波の底に！」
「益荒男も及ばぬ、健氣なお素振でござりまする。この尊
い犠牲の御行には、あらぶる海神の怒も必ず和むことと
ござりませう。」

繰一操

俄かに櫂の輕き
を感じた。

腰許達や益荒男達が、取りくぐりに悲哀驚歎の詞を繰返す
間に、命はじつと目をつぶつて歸らぬ事の追憶に耽られた。
水夫等が努力の少時が過ぎると、彼等は俄かに櫂の輕き
を感じた。と見ると、山のやうな怒濤の大うねりが小さく
小さくなつて來るではないか。空を仰ぐと、所々に雲切れ
がして、西日の光が美しくのぞいてゐるではないか。

海波征服の機

東夷討伐

舵取の掛聲は生氣を帯びて來た。水夫等は甦つたやうに立ち上つて海波征服の機を操つた。兵士どもは疲勞の身を起して、また東夷討伐の希望に燃えた。

水夫等兵士等のざわめきに、命は怪訝の眼を開かれた。そして驚と喜と、限りなき感謝の念とを以て、静まり行く海の波を、雲の切れ目からのぞく夕日の光を、望まれた。そして、

「媛が獻身の誠心が、あの厚く重つた雲を切り裂いたのぢや。海神の怒は鎮つた。悦べ人々、もう大切な朝命も無事に果されるぞ。」

鶴の御一聲

鶴の御一聲に、全船すべてが生色を取りかへした。不安

雲の切れ目から現れた空は、明るいその手を伸ばすやうに擴つて行つた。

が刻々に去つて、希望はやがて彼等の心を領した。同時に雲脚が海の面から遠ざかつて、雲の切れ目から現れた空は、明るいその手を伸ばすやうに擴つて行つた。

「お、空が晴れて行く。蒼い、大空が見えわたる。」

「もう、船を神々が護つて下さる。これも尊い媛の誠心のお蔭ぢや。」

「お、雲が飛ぶ。雲が飛ぶ。明るい空が擴つて行くわ。」

喜の聲があちこちに聞える中に、突然舵取の甲高い聲が聞えた。

「殿下さま。陸が見えます。たしかに上總でござります。もう一時の辛抱でござりまする。」

碧瑠璃園

本名渡邊勝。霞亭と號した。明治大正の通俗小説家。大正十五年(五十六)歿、年六十一。

西條八十

詩人 東京の人 早稻田大學教授 明治二十五年生

「おゝ、陸が見えるといふか。どれ！」
命は立ち上られた。舳の方へ歩いて行かれた。そして橘媛の愛と至誠とが、海神を鎮め、全軍を救ひ、國の大事を助け成した偉大なる功業を、大きな胸いつぱいに偲びつゝ、刻に、近づく陸を見つめられた。
(碧瑠璃園の「物語日本史」改作)

一四 大八洲

西條 八十

むかし、伊弉諾 伊弉册の
御神が海にのべたまふ
天の瓊矛の滴りに
生まれて聖き大八洲。

いま波青き東海に
長く横たふ姿見れば
雲をねらへる蒼龍か
張りつめられし破邪の弓。

あゝ、この龍の躍るとき
をのゝき仰ぐ五大洲
あゝ、此の弓の鳴るところ
悪魔は消えて影もなし。

をのゝき

寇一冠

長汀遠く一千里
 かつて異寇に汚されず
 天地とともに限りなく
 皇恩に咲く山櫻。

いざや讚へん、もろともに
 われらが國の大八洲
 愛と正義に榮ゆる國
 神の御國の大八洲。

サフラン

オランダ語、洎夫藍の漢字を宛てる

森鷗外

名は林太郎
醫學者、文學者
醫學博士、文學
博士

陸軍軍醫總監
東京帝室博物館
長
石見國(島根縣)
生

大正十一年薨
年六十二

巖谷小波

名は季雄
童話家、俳人
東京生
昭和八年歿
年六十四

一五 サフラン

森 鷗 外

名を聞いて人を知らぬといふことが随分ある。人ばかりではない。すべての物にある。

私は子供の時から本が好きだといはれた。少年の讀む雑誌もなければ、巖谷小波君のお伽話もない時代に生れたので、お祖母様がお嫁入の時に持つて來られたといふ百人一首やら、お祖父様が義太夫を語られた時の記念に残つてゐる淨瑠璃本やら、謠曲の筋書をした繪本やら、そんなものを有るに任せて見てゐて、凧といふものを揚げない、獨樂といふものを廻さない。隣家の子供との間に何等の心的接

心的接觸も成立たない。

觸も成立たない。そこでいよいよ本に讀耽つて、器に塵の附くやうに、いろ／＼の物の名が記憶に残る。そんな風で、名を知つて物を知らぬかたはになつた。大抵の物の名がさうである。植物の名もさうである。

父 森 靜男

讀(読) 篇(編)

植學啓源 津山侯侍醫字田川榕庵著、天保六年(一八三九)版行

父は所謂蘭醫である。オランダ語を教へてやらうといはれるので、早くから少しづつ習つた。文典といふものを讀む。それに前後篇があつて、前篇は語を説明し、後篇は文を説明してある。それを讀んでゐた時、辭書を貸して貰つた。蘭和對譯の二冊物で、大きい厚い和本である。それをひつくり返して見てゐるうちに、サフランといふ語に逢著した。まだ「植學啓源」などいふ本の行はれた時代の辭書だ

から、音譯に漢字が當嵌めてある。今でもその字を記憶してゐるから、こゝに書いてもよいが、サフランと三字に書いてある初の一字は、所詮活字には有合はせまい。依つて偏と旁とを分けて説明する。「水」の偏に「自」の字である。次が「夫」の字、又次が「藍」の字である。

「お父さん『サフラン、草の名』としてありますが、どんな草ですか。」

「花を取つて、干して、物に色を附ける草だよ。見せてやらう。」

父は藥箆筒の抽斗から、ちぎれたやうな、黒ずんだ物を出して見せた。父も生の花は見たことがなかつたかも知れ

干手

ない。私にはたま／＼名ばかりでなくて物が見られても、干物しか見られなかつた。これが私のサフランを見た初である。

二三年前であつた。汽車で上野に着いて、人力車をやとつて團子坂へ歸る途中、東照宮の石壇の下から、薄暗い花園町にかゝる時、道端に筵を敷いて、球根からすぐに紫の花の咲いた草を列べて賣つてゐるのを見た。子供から半老人になるまでの間に、サフランに對する知識は餘り進んでゐなかつたが、圖譜で生の花の形だけは知つてゐたので、「おやサフランだな」と思つた。花卉として東京でいつごろから弄ばれてゐるか知らない。とにかくサフランを賣る人が

上野 東京市下谷區上野
團子坂 東京市本郷區の内
作者の住所近くの坂
東照宮 上野公園にある
社 社格は府社
祭神は徳川家康
壇 壇、壇
薄 簿
筵(一) 筵
卉 奔

あるといふことだけ、この時始めて知つた。

この旅はどこへ往つた旅であつたか知らぬが、旅宿を立つたのは霜の朝であつた。もう温室の外にはあらゆる花といふ花がなくなつてゐる頃の事である。山茶花も茶の花もない頃の事である。

サフランにも種類が多いといふことは、これもいつやら何かで讀んだが、私の見たサフランはひどく遅く咲く花である。しかし極端は相接觸する。ひどく早く咲く花だともいはれる。水仙よりも、ヒヤシンスよりも早く咲く花だともいはれる。去年の十二月であつた、白山下（びやくさんした）の花屋の店に、二錢の正札附でサフランの花が二三十千からびた球根

極端は相接觸する。

白山下 東京市小石川區

問う。ひて

から咲出たのが列べてあつた。私は散歩の足を止めて、球根を二つ買つて持つて歸つた。サフランを我がものとしたのはこの時である。私は店の爺さんに問うて見た。

「爺さん。これは土に活けて置いたら、又花が咲くだらうか。」

「えゝ。よく殖えるもので、來年は十位になりませう。」

「さうかい。」

私は買つて歸つて、土鉢に少しばかり庭の土を入れて、それを埋めて書齋に置いた。

花は二三日で萎れた。鉢の上には袂屑のやうな室内の塵が一面に被さつた。私は久しく目にも留めずに見た。

殖える

しをれる

叢(叢)

貝母
ばいぼともいふ。
あみがさゆりの根に生ずるもの。又あみがさゆりの別名。

すると今年の一月になつてから、緑の絲のやうな葉が叢がつて出た。水もやらずに置いたのに、活氣に満ちた、青々とした葉が叢がつて出た。物の生ずる力は驚くべきものである。あらゆる抵抗に打勝つて生じ、伸びる。定めて花屋の爺さんの言つたやうに、段々球根も殖えることだらう。硝子戸の外には、霜雪を凌いで福壽草の黄いろい花が咲いた。ヒヤシンスや貝母も花壇の土を裂いて葉を出しはじめた。書齋の内にはサフランの鉢が相變らず青々としてゐる。鉢の土は袂屑のやうな塵に掩はれてゐるが、その青々とした色を見れば、無情な主人も折々水位やらずにはゐられない。

サフランといふ草と私との歴史である。

行きずりの袖が觸れるやうに

筋—筋

宇宙の間にサフランはサフランの生存をしてゐた。私は私の生存をしてゐた。

これはサフランといふ草と私との歴史である。これを讀んだら、いかに私のサフランに就いて知つてゐることが貧弱だか分るだらう。しかし、どれ程疎遠なものにもたまにたま行きずりの袖が觸れるやうに、サフランと私との間にも、接觸點がないことはない。物語の筋合はたゞそれだけである。

宇宙の間に、これまでサフランはサフランの生存をしてゐた。私は私の生存をしてゐた。これからも、サフランはサフランの生存をして行くであらう。私は私の生存をして行くであらう。

『鷗外遺珠と思ひ出』

小堀杏奴

森鷗外の次女
明治四十二年生

たうとう（到頭の假名）、又とう

大きく暖い笑ひかた。

一六 晩年の父

小堀 杏奴

父が最後に私につくつくしてくれた著物はメリンスで、それが一番よく私に似合つた。暗い四疊半の三越から届けさせた反物の中で、母はむつかしい顔をして考へ込んでゐたが、たうとう隣の書齋にゐた父を呼んで來た。父はその中の一つを擇んで、これで俺の大事なアンヌコをくるんでやれ」と言つて、大きく暖い笑ひかたをした。その著物を元祿袖にしようか、長い袂にしようかと考へたが、たうとう母は元祿袖にする事に決めてしまつた。父が擇んだせいにか妙に懐しい氣のする著物だつた。

寝る前に、私と弟とはよく父の部屋に行つて、「パッパ、一緒に来てよ」とねだつた。そしてお客の來てゐない時は、大抵父は一緒に寢床までついて來てくれて、枕許に坐つて話してゐるか、さうでなければ、もうとつてある父自身の寢床に横になつて話して行つた。「パッパ、手」さう言つて私は父の差出す手を両手で大切さうに持つて寢た。手を持つてゐると、安心してよく寝られるやうな氣がした。「パッパ、僕にも手」どうかすると兩方から、片方づつ手を貰つて持つて寢た。さうして何時の間にか、私は知らない中に眠つてしまつた。

弟の類は其の頃、皆から坊ちゃん坊ちゃんと呼ばれるの

手を貰つて持つて寢た。

阪
坂

で自分で自分の事を坊ちゃんと呼んでゐた。父は大阪のボンチと言ふ言葉でそれをからかつて、ボンチコヤ、などと笑つた。パッパコボンチコヤ、これはパッパの子供のかはい、ボンチコと云ふ意味であつた。同じ意味でパッパコアンヌコなどといふ言葉も生れ、私達の間だけで解る面白い呼び名として、始終用ゐられてゐた。

夜中に私はふいと眼を覺ました。小さい電氣の球がついてゐる筈なのに、何時の間にか消えてゐる。私は暗い中でじつと眼を開けてゐると、たまらなく心配になつて來た。父が死んでしまひはせぬかといふ心配が、突然湧きあがつて來たのだ。どうしたのだらう、自分より大きな強い力が

消え。

父と自分を引離して無理に連れて行つてしまひさうな堪らない心にされた。それは祖母の死を思ひ出した事から始まつてゐた。お祖母さんも死んだ。其の次にかはいがつてゐたボンコといふ犬が死んだ。パッパが死にはしなにかしら。いや大丈夫だ。お婆さんは年取つてゐたが、あ、パッパも年とつてゐる。若しパッパが死んだら自分はどうなるだらう。悲しい、とても生きてはゐられないと思つた。自分も一緒に死んでしまはう。そんな恐しい厭な事があつて堪るものか。「パッパ、パッパ」私はさう言つて、夢中に起さうと考へた。小さい頃ならさうしたらう。併し今は疲れて寝てゐる父を起すのが氣の毒で出来なかつた。

しまはう。

じつと

私は少し父の床の方へ寄つて行つた。父は靜かに寝てゐた。私は闇の中で父の鼻の下にそおつと觸れて見た。息がある。安心だ。でもそれは餘り靜か過ぎた。私は心細くて泣きさうであつた。「カウ、カウ」軽い溜息のやうな軀を規則正しく洩らしながら、父は知らないでじつと寝てゐた。遠くでビョウツと汽車の汽笛の音が聞えた。それが餘計私を悲しくさせた。

かうした氣持が生じて以來、私は父を一分間も離すまいとした。父は體が弱つて來た爲に宴會などは全部斷つたが、母がどんなに頼んでも役所だけは止めてくれなかつた。養生しても一年か二年しか延びない體なら、生きてゐる間、

よわる
ことわる

覺え。

たふれる

没—歿

爲事を續けた方がいゝといふのが父の氣持らしかつた。何もしないといふ事を、父が一番厭がつてゐた事を私はよく覺えてゐる。「何もしないよりはいゝ」といふ言葉を幾たび私は聞いたらう。今になつて、私は其の當時の父の氣持を了解することが出来るし、いよいよ倒れるまでの毎日を自分として好きな爲事に没頭の出來た父の幸福を、寂しい中にも喜んであげたいと思つてゐる。

父は體が弱つてから、唯一つの好物である葉巻を止めてしまつた事も、私は覺えてゐる。葉巻の代りに父はいつも森永のピースを買つた。役所へ行く電車の中で、父はゆつくりピースを取出し、その白い圓い菓子をつまんで私の口

ついでに

吊—弔

議—儀

の中の一つ入れてくれ、ついでに自分の口にも入れて微笑した。先の曲つた茶色のステッキを電車の吊皮に掛けて、それに纏まつてゐた父を思出す。

かういふ事もあつた。三疊の自分の部屋で私はせつせと片附物をしてゐた。ふと氣が附くと、入口の柱の所に父がぼんやりしやがんでゐるのだ。私はそれを不思議に思つた。私達の方から行けば、いつでも爲事を止めて遊んでくれる父であつたが、自分の方から爲事を止めて、人のしてゐる事を見てゐる事などは、生れてから初めてといつていい程珍しい事なのだ。はかない、底氣味の悪い氣持が、風のやうに私の頭の中を吹きぬけた。蹲まつてゐる父の首は

瘠せて、影が薄かった。

いつか父は病氣で寝るやうになつた。寝たのはもう餘程悪くなつてからの話だ。私が病室——これは書齋の隣の洋室だつた——へ這入つて行くと、父は寝たまゝはかなげな笑ひかたをした。父は一生、病氣らしい病氣もせず、過ぎたので、殊更病氣そのものに附いてまはる、あらゆる物を厭がつてゐたらしい。便器を見る事を嫌つて、いつも使つてゐた八丈の海老茶の風呂敷で便器を隠してゐる父の神經を感じた私は、可哀さうでたまらなかつた。私は黙つて父の傍らに坐つた。父は白い手を伸ばした。私はその手を取つて、青い靜脈の透いて見える父の腕を靜かに撫で

賀古氏
名は鶴所、鴨外
の親友、醫學者

しまふ。

てゐた。二人共、長い間別れてゐた人がやうやく逢へたやうに黙つたまゝ、お互にじつと微笑してゐるだけだつた。「パッパ、病氣苦しいの？」苦しくはない。唯藥を飲過ぎて腹具合が悪いので、それで苦しいのよ。これは友人の賀古氏が最近外國から届いたばかりの藥だと言つて父に飲ましたものであつた。その中に、手を取られたまゝ、父は寝てしまつた。苦しさうな息使ひをしながら。

私は急に悲しくなつた。強くて強くて、父は本當に優しいのに強かつた。子供の前で寝てしまふなんて事は無かつた事だ。いつだつて私達を守つてゐた。父があるといふ安心で、私達は遊びながらもよく寝てしまつたものだ。

あふいだ

それが今は子供のやうに私に手を取られながら、父は眠つてしまつた。私は傍にある團扇を取つて靜かに父をあふいだ。其の團扇には松葉の模様が描いてあつたのを覺えてゐる。あふいでゐる中に、涙が後から後から流れて、團扇の上にぼとぼと音を立てて落ちた。

それから、向うの縁側から病室の窓越しに父の部屋を覗き、顔を見て笑つてくれたのが最後で、父が危篤となり、私が母の心遣ひから知人の家に一時預けられる事になつて、よそながら窓を隔て、父の顔を見に來た時は、もう父は唯にぶい眼を光らせてゐるだけで、私の微笑に應へてくれる事も出來なくなつてゐた。父の床の前で誰だか解らない男

の人が疊に頭をおしつけたまゝ、じつとしてゐるのをぼんやり私は見てゐた。「パッパ、さよなら。よくなつて頂戴」心にさう思ひながら、私は涙をふきもしないで、もう私を忘れてしまつたやうに知らん顔をしてゐる父の顔を見て、何時までも、何時までも立ち盡してゐた。

だから、私は父の死ぬところを知らなかつた。學校へ行くと、皆が新聞で見た父の事を話題にしてゐた。私は友達から父の事の出でゐる新聞を見せて貰つた。陸軍の軍服を著た父の傍に、今曉が一番あぶないと書いてあつた。

死ぬ前に呼びに來てくれるのだと思つてゐた私は、子供らしい考へ方で、今曉があぶないと書いてあつたので、九日

險—儉

の朝になつて、家から使が來て呼びに來られた時は、もう一番危険な時機が過ぎて、父は自分に逢ひたいのだらうと思つて喜んで歸つて來た。洋室に這入つて、白い布を顔に掛けてゐる父を見た時の私は、驚きのあまりに泣く事もせず、凝りかたまつたやうに突つ立つてゐた。母に連れられて、部屋を出て、三疊の廊下の曲角まで來た時、私は初めて大聲でわめくやうな聲を上げて泣いた。三疊の私の部屋には、多勢の人がいつぱいに詰めかけてゐた。明るい庭と、私の泣聲に驚いたやうにこつちを振返つて、いたましいやうな顔附をしてゐる人々の顔とをかすかに覺えてゐる。

明るい庭と
……人々
の顔とを

私はこの時の母の心遣ひを今でもありがたいと思つて

くらゐ。

私にとつて、その時の父は私の總べてであつたのだ。

ある。私達小さい姉弟にとつて、父の臨終といふ、絶大の苦痛を受け入れる力は、到底無かつたにちがひないとは、今でも考へてゐる事だ。それでなくてさへ、父の死によつて、私は性格が一變するやうなひどい神経的な打撃を受けてゐると思つてゐる。十四歳の少女期にあつた私より、二歳年少の弟がどのくらゐ少い打撃で濟んだか？母は後になつてもよく言つた。「お前がもう少し大きくなつてゐるか、もう少し小さければよかつたのに」と。

年齢によつて親が全部的でない場合がある。私にとつて、その時の父は私の總べてであつたのだ。

『晩年の父』

一七 元 日 や

内 藤 鳴 雪

内藤鳴雪
名は素行、舊松
山藩士、弘化四
年—大正十五年

元日や一系の天子不二の山

流木のだぶりくと春の川

夏山の城ありくと夜明けたり

初冬の竹縁なり詩仙堂

松 瀬 青 々

詩仙堂
京都の東郊、石
川丈山が閑居し
た跡
松瀬青々
名は彌三郎、大
阪に生る。明治
二年—昭和十二
年
方丈記
鴨長明の隨筆

東海に此の國ありて初日の出

二三年見ぬ間の紙魚や方丈記

里の菊日南しづかに野埃す

胼ひびの手を拭へばあたる薄日かな

夏 目 漱 石

夏目漱石
名は金之助
東京の人
慶應三年—大
正五年

明天子かみ上にある野の長閑なる

夕立や犇ひしめく市まちの十萬家

朝寒の顔を揃へし机かな

鳥飛んで夕日に動く冬木かな

芥 川 我 鬼

芥川我鬼
名は龍之介
東京の人
明治二十四年
—昭和二年

白桃や蒼うるめる枝の反り

松かげに鶏はらばへる暑さかな

竹林や夜寒のみちの右ひだり

山茶花の蒼こぼるゝ寒さかな

新井白石

江戸の學者

將軍家宣の侍講

名は君美

享保十年(三三五)

歿、年六十九

天正十三年

(三四五)

徳川殿

徳川家康

祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

重次

本多重次

慶長元年(三三六)

歿、年六十八

一八 鬼作左の嬉し泣き 新井白石

去にし天正十三年三月に、徳川殿御背中に疔ちやうといふもの出来て、既に危く見えさせたまひしかば、内外の醫療術を盡くしけれども、その驗しるしなく、たゞ弱りに弱らせたまひ、自らもこれ迄と思し召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて、御跡の事ども仰せおかる。人々の周章いふに及ばず、士民百姓等に至るまで、その程々に隨ひて、祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。重次御枕に取りつきて泣く／＼申しけるは、「殿も定めて覺えさせ給ひなん、重次が昔この病を受けしに、立ちどころに驗得し良醫の候、彼を召して見せ試み給ふべし。」

と申す。「諸醫既に手を束ね、家康また死を決す、この上醫療その詮なし、且つは命惜しむに似たり。」とて、用ゐ給はず。重次大きに怒つて、「かほど大事の腫物かる／＼しく思し召し



御心がらとはいひながら、あつたらしき命かな。

かな。諸醫術盡きぬと申す上は、彼等いかでか治しまるべき。年老いたる重次が、御跡にさがつて、御供叶ふべか

悔つて、事急なるに臨めばこ

新 そ、諸醫も術盡きぬれ。それ

井 にまた良醫して治しまるら

白 せんとするをも用ゐ給はず。

石 失せ給はん事御心がらとは

いひながら、あつたらしき命

見苦しい殿原の止めやうや。

らず。さらば御先へ參らん。」とて、御前を罷り立つ。徳川殿大きに驚かせ給ひ、「あれ止めよ。」と仰せければ、近く侍らふ人走り出て引きとづめ、「仰せらるべき旨あらせられ候。」といふ。重次大きに聲を怒らして、「最期の暇乞うて罷り申す者を見苦しい殿原の止めやうや。」と罵つて出でんとす。「されば候、その人を止めよとの御使が、えこそ止めね、と申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」と言はれ、「げには、さも候。」とて、御前にまゐる。徳川殿、「汝は物に狂ひてかくはいふか。家康未だ死しはてぬに、たとひ家康が命終るとも、汝等が世にあらんを頼みにこそ死すべけれ。また汝等も如何にもして一日も世に残りて、若き者ども掟して、我が家の絶えざらん

詮なき死の供せんとする事やある。

犬死せん人の御供その詮なし。

負はぬ手も候はず。

御掣北條殿
北條氏直、その妻は家康の女督子。

様を計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある。」と仰せければ、「いや、それは人に依つての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰せまでも候はず。



本多重次

犬死せん人の御供その詮なし。重次若年の昔より、こゝかしこの軍に従つて、眼射られ、指落され、足斬られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたは、重次が身一つに集つて、世に交らん事、叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に恐れも慕はれも仕りつれ、殿のなくならせ給ひなば、他人までも候まじ、まづ御掣の

亡ぼされん事また踵をめぐらすべからず。

後指さされん事。
武田の家人等
武田勝頼の遺臣
をいふ。

北條殿、我が國々を取らんとし給はん、に若き人々が、行末久しう仕へんと頼み切つたる主に、忽ちに別れて氣おくれし、はか／＼しき矢の一筋をも射出だすこと叶ふべからず。當家亡ぼされん事また踵をめぐらすべからず。重次それまでながらへて、あの年寄つたるかたは者は、徳川殿の譜代にて某（むか）といはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世には恥をさらすらんと、後指さされん事、老の恥何事かこれに過ぎ候べき。この頃までも、武田の家人等御當家に召されて、さらぬ人にも手を束ね、膝を屈めしを、世にも哀れに思ひしが、今はこの老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿に後れ參らせんが悲しきばかりにも候はず、我が身の果

汝が言ふところ
道理至極せり。

も淺ましさに、まづ御先に死する事にて候」と申す。「汝が言ふところ道理至極せり。さらば醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に至りて、家康空しくならんとも、汝もまた家康が心に任せ、如何なる恥を見つべくとも、一日も生き残つて、後の事よきに計ふべしと存ずるや、いなや」と仰せければ、「重次が申す旨に任せられんには、重次いかでまた仰せを背き參らすべき」と申す。さらば醫師召させよとて召さる。醫師やがて參つて、御灸治よろしかるべしと申せば、重次艾とつて据うる。御灸の痛み覚えさせ給はねば、艾を増し加ふる事多くして、後いさゝか痛ませ給ふよし仰せければ、御藥をつけて參らせ、御藥湯をも進め奉りしに、その夜の半ば

聲を限りに泣く。

に、御腫物潰れて、膿水血夥しう流れ出でて、御惱み立ちどころに輕ませ給へば、重次は嬉し泣きに聲を限りに泣く。御前伺候の人々も、感涙を共に流しけり。
〔藩翰譜〕

菊池 寛

小説家、文學者
高松市の人
明治二十二年生

一九名 君

菊池 寛

將軍家茂

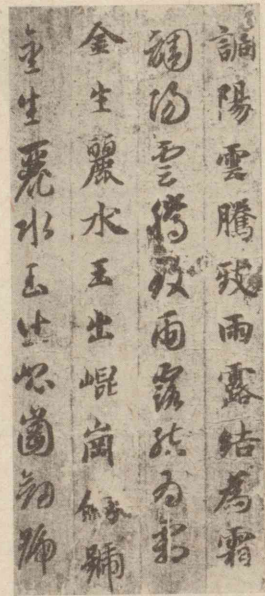
安政五年(二五〇)
將軍宣下、慶應
二年(二五六)歿、
年二十一。

雲と書き始めた文句が雨とならないうちに筆がのたくつて、龍のやうな滅茶苦茶な曲線を幾つも書いてゐる。

十四代將軍家茂公は、先刻から悪戯ばかりしてゐる。戸川播磨守が懸命に書いた千字文の中の「雲騰致雨露結爲霜」といふ楷書の立派なお手本の方などは見向きもしないで、奉書のお草紙の上に、やたらに筆をのたくらせてゐる。雲と書き始めた文句が雨とならないうちに筆がのたくつて、龍のやうな滅茶苦茶な曲線を幾つも書いてゐる。一番最

雲中の龍

(律呂)調、陽雲
騰致、雨露結爲
霜、金生麗水、
玉出崑岡、劍
號(巨闕)



千字文(智永書)

のやうなでたらめな曲線になつてしまふのである。そして時々眼がお草紙から離れて、傍の

二間
墨を縦に二つの距離。一間は約百八十二センチ。

金蒔繪の火鉢の方に移つて行く。が、その火鉢の手觸りの柔かさうな灰に立てられてゐる線香は、まだ半分もたつてゐない。それを見るといよく退屈し始めた十四代將軍は、二間ばかり下座に畏まつてゐるお氣に入りの小姓の一

目顔で笑ひかけ
る。眞面目くさつて
ゐる。
混沌。

人に、目顔で笑ひかけて見る。が、小姓が案外眞面目くさつ
てゐるので、また仕方なしにお草紙に雲と書き始める。が、



徳川家茂

雲はいつまで経つても混沌と
したまゝである。雲と書き始
めた筆が自由に活潑に紙の上
を無意味に一巡すると、家茂公
は手荒く新しい紙をめくる。
さつきから何枚眞新しい御獻
上物の奉書が無駄にしたか知れない。奉書のお草紙は十
五枚綴ぢになつてゐる。線香の方はともかくも、お草紙の
方さへ片が附けばその日のお稽古は終つたことになるの

線香がなか／＼と見
た／＼ないと見て
取つた家茂公
は、今度は非常
手段に出て、お
草紙の方をなす
り潰さうとして
ゐる。

戸川安清

安政六年(五五)
家茂の傳准小姓
組番頭となる、
時に年七十。明
治元年(三五)歿、
年八十二。

だ。線香がなか／＼と見
た／＼ないと見て取つた家茂公は、今度
は非常手段に出て、お草紙の方をなすり潰さうとしてゐる
のである。

戸川播磨守安清は默然として家茂公の亂行を見てゐた。

彼が習字のお相手として召出だされてから、まだ一月も経
つてゐない。片假名やいろは假名のお稽古が濟んで、漢字
のお習字に移ることになつて、彼はお相手として特に召出
だされたのである。林家の人々などを差越えてのかうし
た沙汰は、彼としては絶大な名譽であつた。彼は老後の凡
てをお役目のために盡くさうとしてゐる。そして將軍家
の御手蹟を少しでもよくすれば、この上の御奉公はないと

思つてゐる。

ところが、肝腎の家茂公は、彼が手を執つて教へ始めてから、一字一畫も眞面目に書いたことがない。いろは假名の稽古のお相手が、大奥の中藤であつたためだらう、習字といへばたゞ悪戯わるさをして時間を潰しさへすればいゝと思つてゐるらしい。

幼少の折から嚴しい師に就いて、一點一畫も忽せにしないやうにと教へられた播磨守は、書道に對して可なり敬虔な心持を懷いてゐる。彼は口を漱ゆすいで、手を淨めた後でなければ筆を執つたことさへない。それなのに、家茂公は彼の面前で悪戯わるさばかりしてゐる。字を書くことの尊たふとさを少

播磨守は、書道に對して可なり敬虔な心持を懷いてゐる。

家茂公の爲すことがすべて播磨守の心を痛めた。七十を三つも越してゐる一徹な播磨守の心を痛めた。御不興を蒙る。

しも知つて居られない。慰み事か、弄あそび事か、何かのやうに書を瀆してゐる。家茂公の爲すことがすべて播磨守の心を痛めた。七十を三つも越してゐる一徹な播磨守の心を痛めた。彼は、どうにかして主君のかうした心掛こまごまを矯たごさなければならぬと思つた。そのためにはたとひ御不興を蒙らうとも、お役御免にならうとも、厭ふところはないとまで思つてゐた。お稽古の日が重なるに連れて彼の決心は愈堅くなつて來た。ところが今日は家茂公の悪戯わるさがいつもよりもつとひどい。一字だつて眞面目には書かれなないのである。

白絹しろぎぬのやうにつやくと光る奉書を、五六枚も無駄にし

家茂公ははッと本能的に駭か

播磨守はびくともしなかつた。

播磨守はいつかな放さなかつた。

て、更に幾枚目かの紙にてたらめな曲線を書かれようとした時である。播磨守は無言のまゝ、家茂公の筆を持つた掌をキユツと握りしめた。家茂公ははッと本能的に駭かれたやうであるが、直ぐ子供ながらに自分の位置の優越を思ひ出されると、威壓的な烈しい目附で、播磨守の顔をじつと見られた。が、播磨守はびくともしなかつた。彼は柔かい小鳥のやうな生温い掌を、意識して、少しは懲罰的に痛さを感じせしめる位に強く握りしめながら、奉書の上に「雲騰致雨露結爲霜」と書かせた。家茂公は筋ばつた掌で握りしめられる痛みに堪へかねて、途中で二三度振りほどかうとした。が、播磨守はいつかな放さなかつたが、その八字がさつかり

青磁の水人

白髪の頭。

書き了へられた時である、播磨守がその堅い把握の手を緩めて、じつと兩手を膝に置きながら、公が書いたといふよりも、自分の書いた八字に眺め入つた時だつた。赤くなつた右の掌をじつと見てゐた家茂公は、机の上にあつた青磁の水入を持つて立ち上がると、いきなりたッぷりと漉へられてゐた水を播磨守の白髪の頭へざぶりとかけたまゝ、
「わあッはゝゝ、わあッはゝゝ」と笑ひながら、大奥の方へ走り込まれたのである。

一徹な播磨守は、主君から――幼少な年齢から來る悪戯いたづらであるとはいへ――烈しい侮辱を受けたので、頭から落ちる雫を拭ひもやらず、机に兩手をかけたまゝ、暫くは身動きもし

餘りなお悪戯ぢや。御幼少であるといへ、餘りな御亂行ぢや。

ないで考へ込んだ。

駭いて馳け寄つたお側衆の小出勢州は、懷紙を出して、播磨守の額から顎にかけて拭き下しながら、

「餘りなお悪戯ぢや。御幼少であるといへ、餘りな御亂行ぢや。御主君とはいへ、心外でござらう。拙者から御大老に申し上げて、きつい御諫言を申し上げることに致さう。御勘辨なされい。」と、氣の毒さうに慰めた。

播磨守は默然として勢州の拭くのに委せてゐたが、濡れた上下の威儀を正すと、心持聲を落しながら、

井伊侯に申し上げるなど、輕はずみな事をして下さるな。今日

「井伊侯に申し上げるなど、輕はずみな事をして下さるな。今日といふ今日は、上様の御仁慈のほどが骨身に徹へ申し

といふ今日は、上様の御仁慈のほどが骨身に徹へ申したわ。

田上鷹 吹風に夕きりはれて住よしのきしの田つらに落るかりかね 安清



蹟筆清安川戸

たわ。勢州殿、有様は斯様でござる。拙者今日はお机の前に坐つて以來頻りに小用を催したのをじつと辛抱致し居つたところ、老年の悲しさには、懸命にお手を執つた砌、つい

失念して少々洩らしたのでござる。君前に於てかゝる大不敬を犯した事が、若し大目附の耳に入らうなら、謹慎閉門はおろか、切腹の御沙汰にも至らうかと、心も心ならず苦慮致し居つたのを、それとお察し遊ばした上様は、拙者の失策を御自身の悪戯で掩ひ隠して給はつたのぢや。御仁慈の

あつとばかり膝を叩いて、家茂公の聰明な仁慈に感歎の聲を上げたのである。

ほど骨身に徹へ申したわ。」と、播磨守は老いた兩眼に涙をひたひたと湛へてゐたのである。

小出勢州を始め並みある近習達は、あつとばかり膝を叩いて、家茂公の聰明な仁慈に感歎の聲を上げたのである。

その事があつてから、この逸話は江戸城の隅から隅へと傳へられた。登城する大名の一人から一人へと傳へられた。皆が異口同音に名君家茂公の君徳を讃へぬ者はなかつた。たゞこれを聞いた大老井伊直弼だけは、話を半分ほど聞くと眉をひそめながら、

「お悪戯にも程のあつたものぢや。」と言つたまゝ、話手が家

井伊直弼

彦根城主。幼名鐵之助。安政五年(五、八)四月大老となり。萬延元年(五、三)兎刃に斃れた。年四十六。

芥川龍之介

大正の小説家東京の人昭和二年(五、七)歿、年三十六大川端東京市の東部を貫流する隅田川の河岸。

茂公を讃め上げるのを聞いても、にこりともしなかつた。

二〇 大川の水

芥川龍之介

自分は、大川端に近い町に生まれた。家を出て若葉に掩はれた、黒堀の多い横網の小路を抜けると、すぐあの幅の広い川筋の見渡される、百本杭の河岸へ出るのである。幼い時から、中學を卒業するまで、自分は殆ど毎日のやうに、あの川を見た。水と、船と、橋と、砂洲と、水の上に生まれて水の上に暮してゐる慌しい人々の生活とを見た。眞夏の日の午すぎ、燦けた砂を踏みながら、水泳を習ひに行く通りすがりに、嗅ぐともなく嗅いだ河の水のほひも、今では年と共に、

親しく思ひ出されるやうな氣がする。

自分はどうして、かうもあの川を愛するのか、あのどちらかといへば泥濁りのした大川の生温かい水に、限りないゆ

かしさを感じるのか。自分な

がらも、少しくその説明に苦し

まずにはゐられない。たゞ自

分は、昔からあの水を見る毎に、

何となく、涙を落したいやうな、



芥川龍之介

水を見る毎に、何となく、涙を落したいやうな、言ひがたい慰安と寂寥とを感じた。

なつかしい思慕と追憶との國にはひるやうな心持がした。

言ひがたい慰安と寂寥とを感じた。全く、自分の住んでゐる世界から遠ざかつて、なつかしい思慕と追憶との國にはひるやうな心持がした。この心持のために、この慰安と寂

寥とを味はひ得るために、自分は何よりも大川の水を愛するのである。

銀灰色の靄と、青い油のやうな川の水と、吐息のやうな覺束ない汽笛の音と、石炭船の鳶色の三角帆と、すべて止み難い哀愁を喚び起すこれらの川の眺は、いかに自分の幼い心を、その岸に立つ楊柳の葉の如くをのゝかせたことであらう。

この三年間、自分は山の手の郊外に、雑木林の蔭になつてゐる書齋で、靜平な讀書三昧に耽つてゐたが、それでも猶ほ、月に二三度はあの大川の水を眺めにゆくことを忘れなかつた。動くともなく動き、流るゝともなく流れる大川の水

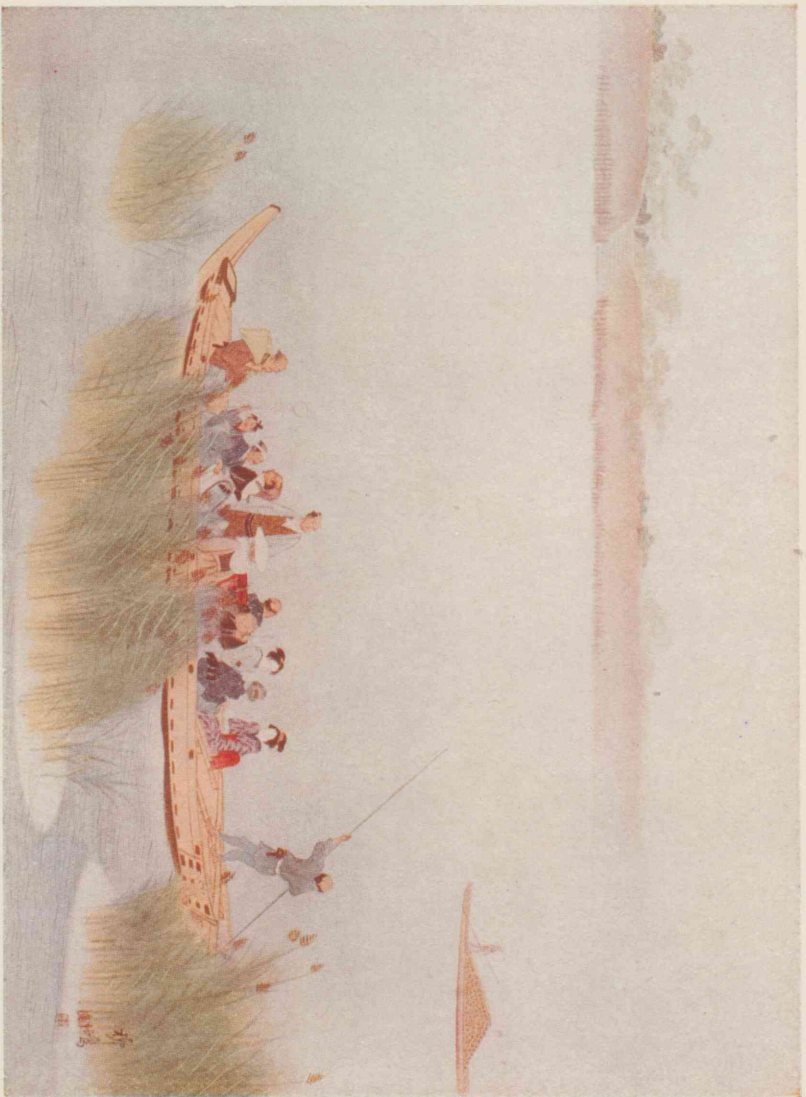
銀灰色の靄と、青い油のやうな川の水と、吐息のやうな覺束ない汽笛の音と、石炭船の鳶色の三角帆と、すべて止み難い哀愁を喚び起すこれらの川の眺は、いかに自分の幼い心を、その岸に立つ楊柳の葉の如くをのゝかせたことであらう。

靜平な讀書三昧に耽つてゐる。

長旅に出た巡禮が、漸くまた故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由ななつかしさに融かしてくれる。純なる本來の感情に生きる。

の色は、靜寂な書齋の空氣が休みなく與へる刺戟と緊張とに、切ない程あわたゞしく動いてゐる自分の心をも、ちやうど長旅に出た巡禮が、漸くまた故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由ななつかしさに融かしてくれる。大川の水があつて、始めて自分は再び純なる本來の感情に生きることが出来るのである。

自分は幾度となく、青い水に臨んだアカシアが、初夏のやはらかな風に吹かれてほろ／＼と白い花を落すのを見た。自分は幾度となく、霧の多い十一月の夜に、暗い水の空を寒さうに鳴く千鳥の聲を聞いた。自分の見、自分の聞くすべてのものは、悉く大川に對する自分の愛を新たにする。ち



(筆 塙 柳 崎 島)

し 渡 の 屋 竹

夏川の水から生まれる黒蜻蛉の羽のやうな、をのゝき易い少年の心。
驚異の眸を見はらずにはゐられない。

やうど夏川の水から生まれる黒蜻蛉の羽のやうな、をのゝき易い少年の心は、その度ごとに新たな驚異の眸を見はらずにはゐられないのである。殊に夜網の船の舷に倚つて、音もなく流れる黒い川を凝視めながら、夜と水との中に漂ふ「死」の呼吸を感じた時、いかに自分は、たよりのない淋しさに迫られたことであらう。

この大川の水に撫愛される沿岸の町々は、皆自分に取つて、忘れ難いなつかしい町である。吾妻橋から川下ならば、駒形、並木、藏前、代地、柳橋、或は多田の薬師前、うめ堀、横網の川岸——どこでもよい。これらの町々を通る人の耳には、日を受けた土藏の白壁と白壁との間から、格子戸づくりの薄暗

硝子板のやうに青く光る大川の水。

あゝその水の聲のなつかしさ、つぶやくやうに、拗ねるやうに、舌うつやうに、草の汁をしぼつた青い水は、日も夜も同じやうに、兩岸の石崖を洗つてゆく。

河竹默阿彌
幕末明治の劇作家、本名吉村芳三郎、明治二十六年(一八九五)歿、年七十八。

い家と家との間から、或は銀茶色の芽をふいた柳とアカシアとの並樹の間から、磨いた硝子板のやうに青く光る大川の水が、その冷やかな潮の匂と共に、昔ながら南へ流れるなつかしい響を傳へてくれるだらう。あゝ、その水の聲のなつかしさ、つぶやくやうに、拗ねるやうに、舌うつやうに、草の汁をしぼつた青い水は、日も夜も同じやうに、兩岸の石崖を洗つてゆく。班女といひ、業平といふ、武藏野の昔は知らず、遠くは多くの江戸淨瑠璃作者、近くは河竹默阿彌翁が、淺草寺の鐘の音と共にその殺し場の氣分を、最も力強く表すために屢、その世話物の中に用ゐたものは、實にこの大川のさびしい水の響であつた。

自分の記憶に誤がないならば。

殊にこの水の音をなつかしく聞くことの出来るのは、渡し船の中であらう。自分の記憶に誤がないならば、吾妻橋から新大橋までの間に、元は五つの渡しがあつた。その中で、駒形の渡し、富士見の渡し、安宅の渡しの三つは、次第に一つづつ、いつとなく廢れて、今ではただ一の橋から濱町へ渡る渡しと、御藏橋から須賀町へ渡る渡しとの二つが、昔のまゝに残つてゐる。自分が子供の時に比べれば、河の流れも變り、蘆荻の茂つた所々の砂洲も跡方なく埋めら



清洲の橋の美觀

水の動くのにつ
れて、搖籃のや
うに軽く體をゆ
すられる心地よ
さ。

れてしまつたが、この二つの渡しだけは、同じやうな底の淺い舟に、同じやうな老人の船頭を載せて、岸の柳の葉のやうに青い河の水を、今も變りなく日に幾度か横ぎつてゐるのである。自分はよく、何の用もないのに、この渡し船に乗つた。水の動くのにつれて、搖籃のやうに軽く體をゆすられる心地よさ。殊に時刻が遅ければ遅いほど、渡し船のさびしさとうれしさとが、しみじみと身に沁みる。低い舷の外は直ぐに緑色の滑かな水で、青銅のやうな鈍い光のある、幅の廣い川面は、遠い新大橋に遮られるまで、たゞ一目に見渡される。兩岸の家々は、もう黄昏の鼠色に統一されて、その所々には障子にうつる灯の光さへ黄色く靄の中に浮かんで

舵を執る人の有
無さへもわから
ない。

でゐる。上げ潮につれて灰色の帆を半ば張つた傳馬船が、一艘、二艘と稀に川を上つて來るが、どの船もひつそりと静まつて、舵を執る人の有無さへもわからない。自分はいつもこの靜かな船の帆と、青く平に流れる潮のほひとに對して、言ひやうのないさびしさを感ぜずにはゐられないのである。けれども、自分を魅するものは獨り大川の水の響ばかりではない。自分に取つては、この川の水の光が殆どどこにも見出だし難い滑かさと暖かさを有つてゐるやうに思はれるのである。

吾妻橋、厩橋、兩國橋の間、香油のやうな青い水が、大きな橋

船宿の白い行燈をうつし、銀の葉裏を翻す柳をうつして、靜かに光りながら流れる。

殆ど比喩を絶した、微妙な色調。

臺の花崗石と煉瓦とをひたしてゆくうれしさは言ふまでもない。岸に近く、船宿の白い行燈をうつし、銀の葉裏を翻す柳をうつして、靜かに光りながら流れるのも、その重々しい水の色にいふべからざる溫情を藏してゐる。

殊に日暮に、川の上に立ちこめる水蒸氣と、次第に暗くなる夕空の薄明りとは、この大川の水をして、殆ど比喩を絶した、微妙な色調を帯ばしめる。自分はひとり、渡し船の舷に肘をついてもう靄の下りかけた薄暮の川の水面を、何といふこともなく見渡しながら、その暗綠色の水のあなた、暗い家々の立ち並んだ空に、大きな赤い月が出るのを見て、思はず涙を流したのを、恐らく終世忘れることが出来ないであらう。

〔芥川龍之介全集〕

三木露風

詩人

名は操

兵庫縣の人

明治二十二年生

越え

越え超

二 一 紅 椿

三 木 露 風

山越えて來たふるさとの、

家の籬にただ一つ、

紅い椿が咲いてゐる。

ああ紅椿紅椿、

ありし昔をそのままに、

夢ともならで咲く花よ。

遠い消え

昨日吹いたる西風は
遠い響となつて消え、
今日麗かな海の町。

あゝ西風の止んだやう、
わが悲しみも過ぎ去つて、
ひとりしみじみ海を見る。

ふるさとの、ふるさとの、
家の籬の紅椿、
その葉を越して

海を見る。

穂積律之助
海軍造船少將
東京の人
明治十七年生

二二 潜水艦上の或日

穂積律之助 (講演)

或國と或國と戦半ばの或日に、あなた方が私と一緒に、一隻の潜水艦に乗つて荒波を航行してゐると思つて下さい。波のまにまに揺籃のやうに動揺する狭いブリツヂの波除け板に身を寄せて、鋭い眼で、じつと行手を睨んでゐるのは我等の艦長です。彼は今、突然そばに立つてゐる中尉を呼んで、黙つて、或方向を指さしました。二人は急いで、雙眼鏡をかざして、二言三言さゝやき合ひました。二人はやがて目を雙眼鏡から離しますと、張り切つた顔の筋肉を少し

互に會心の微笑を漏らしつゝ。

嵐の前の静けさといつた緊張した沈黙。

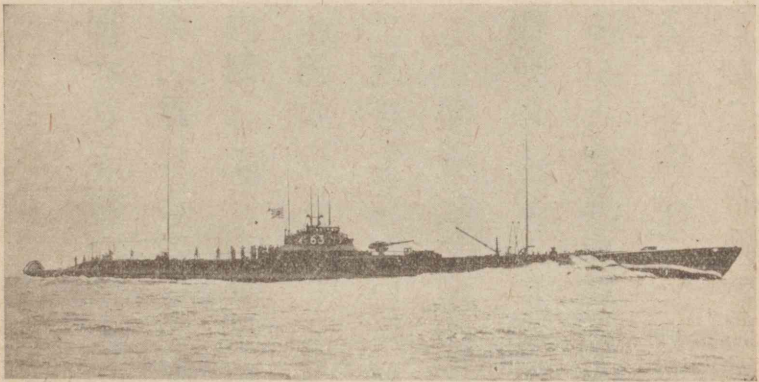
ゆるめて、互に會心の微笑を漏らしつゝ、うなづき合ひました。だが、やがて、

「潜行準備！」

嚴かな艦長の命令が、艦内に響き渡りました。一分！

二分！ 嵐の前の静けさといつた緊張した沈黙が、暫くつづきます。

その中に艦長は「潜航！」と鋭く叫びながら、司令塔に飛び込みました。中尉も、つゞいて内へ飛び込みながら入口の鐵蓋をバタリと閉ぢて、手早くこれを締めつけました。同時に今まで規則正しい響を傳へて運轉してゐたディーゼル機關がピタリと止つたかと思ふと、電氣のモーターがブ



ンブンと鈍い唸り聲を立てて、廻り出しました。すべて潜水艦は水面上にある時は重油の爆發を利用するので、かの自動車の發動機を大きくしたやうなディーゼル機關によつて推進されるのでありますが、潜航の際には電力がそれに代るので、そして、その電力は船の底に積んである二百あまりの大型の蓄電池から取るのです。やがてどこともなく大きな瀧の

やうな水音が聞えて來ます。これは、タンクの口が一時に開かれて海水がその中に漲り込む響です。この艦は全體が二重に出來てゐて、外側は水切りのよい形の船體ですが、内側はこの司令塔の下に前後に横たはつてゐる丈夫な鋼の筒なのです。まづ藥を刻む藥研の中に、お茶の罐を入れて蓋をしたといふ形でせう。その内側と外側との間の大きな場所が、全部タンクになつて居り、艦首から艦尾までの間がいくつもの部分に仕切られて、その一つ／＼に、水の入る口と空氣の逃げ出す穴とがあります。それが今「潜航」といふ命令で、その口が開かれたのですから、海の水がどしどし二重船體の間に流れ込んで、艦の重さが刻々に増して

來ます。そしてそのタンクがいつぱいになると、ちやうど鯨や龜の身體のやうに、水と同じ重さになり、飛行船がフワリフワリと空中を歩くのと同じ工合に、水の中で自由に浮き沈みが出来ゝやうになります。

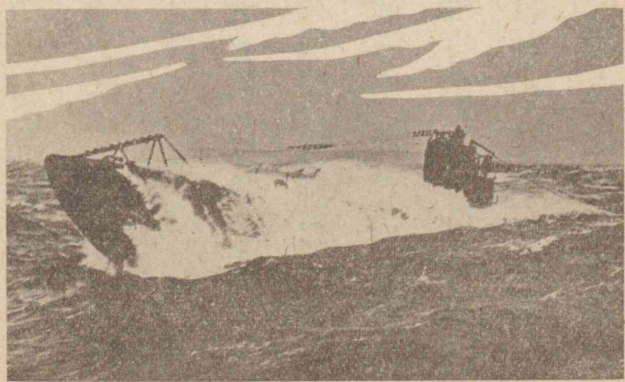
かくしてほんの束の間、一分と經たない中に、私どもは魚になつてしまひました。水の上に残るものは、たゞ太さ二寸位のペリスコープの先が二三寸ばかり、それが始終波の間に見え隠れして居りますが、その頂上にレンズの裝置があつて、それに映ずる海上の有様をば、反射鏡の作用によつて、艦長は水面下に没した司令塔内に居りながら、手に取るやうに見ることが出来るのです。

ほんの束の間、
一分と經たない
中に、私どもは
魚になつてしま
ひました。

二三寸
一寸は約三セン
チ。

百呎
一呎は約三十セ
ンチ。

突然司令塔から「深さ百呎^{フイット}急げ！」といふ命令が來ました。同時に、水平舵のハンドルが忙しく廻され、これにつれて、深さを示す針が、六十、七十、八十とぐんぐん進んで行きます。その中に頭の上で遠雷のやうな音が、次第に遠く消えて行きました。敵の驅逐艦のプロペラ一の音です。我が潜水艦は、敵艦を護衛するため、その前方遙かに進んで來るこの小さい敵には目もくれず、また幸に見つからずに、その下をうまくと潜り抜け



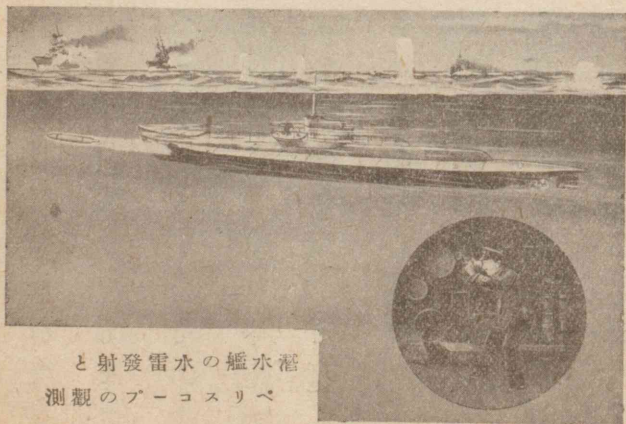
艦水潜るすとんせ行潜に將

敵に肉迫する。

威風堂々と海を
壓して進んで來
る。

四方の海面を電
光のやうに見て
取りました。

たのです。やがて「浮き上れ、深さ五十呎、急げ！」の號令がかりました。いよゝゝ浮き上つて敵に肉迫する時が來たのです。艦は百呎の海底から一氣に浮かび上つて、ペリスコープの先が水の上に出るや否や、艦長の目には、威風堂々と海を壓して進んで來る敵の大軍艦の姿が映りました。映ると同時に、艦長はグルリと身を廻して、四方の海面を電光のやうに見て取りました。艦長はペリスコープの先が海面に出る度毎に、チラ



と射發雷水の艦水潜
測觀のブーコスリベ

魚雷は、艦に僅かばかりの震動を残して直ちに飛んで行きまし

リチラリと敵を見るだけですが、熟練した目には、それですべてが解るのです。やがて艦長の身體が身震ひするまでに引締つたと見ると、今度は上げたペリスコープをそのままジイーッと前方を睨みながら、「打てッ！」の命令を下しました。四本の魚雷は、艦に僅かばかりの震動を残して直ちに飛んで行きました。魚雷は整へられたお互の隔りを正しく保つて、眞直に敵の横腹を目がけて突進して行きます。壓搾空氣で走らす魚形水雷の吹き出す泡が、水面に白い尾を曳いて進んで來たのに驚いた敵の軍艦は、急いで身をかはさうとしましたが、大きな身體は、さう身輕には動きません。その中に、「深さ百五十呎急げ！」の命令が下りましたが、

シーンとして耳を澄ましてゐた誰もが、思はずドッと勝鬨を上げました。

水雷の不意打に痛手を負つた敵艦が、見えない敵に無念の齒がみをして、水雷が來た方の海面を盲打ちに射撃して、死物狂ひの一人相撲を取つてゐるので

この艦長の命令が終るか終らない中に、續け様に二度、船の全體がビリ／＼と震動して、雷のやうな大音響が水を傳はつて聞えました。シーンとして耳を澄ましてゐた誰もが、思はずドッと勝鬨を上げました。四本の水雷の二本が見事敵艦に命中したのです。潜水艦はグッと前かゞみになつてぐん／＼と潜つて行きます。その時頭の上で、鐵板を鐵槌で叩くやうなガン／＼といふ音が聞え出しました。水雷の不意打に痛手を負つた敵艦が見えない敵に無念の齒がみをして、水雷が來た方の海面を盲打ちに射撃して、死物狂ひの一人相撲を取つてゐるのです。しかし水面にぶつかつて破裂する彈が我々に與へる結果は、たゞそのガン

ガンといふ音だけです。その間にも沈み入つた深さが次第に増して百呎を越えた時、彈の響がピタリと止むと共に、今度は石臼を挽くやうな音が、これに代つて聞えました。水の中では物音が空氣の中より遙かによく聞えます。この薄氣味悪い響は、先に見た數隻の驅逐艦が追ひ迫つて來たのです。我が艦の中に備へつけた水中の音を聞く受話器には、猶ほはつきりとこの音が傳はりますが、敵の驅逐艦も同じくその受話器に耳を澄まして、我が艦のフロベラーの音を頼りに追つて來ました、それが、今船の直ぐ上に来て、親の仇この下にありと突き止めたのです。その瞬間に、音といふか、震動といふか、ピンと身體を鞭で打たれたやうに

艦は物に驚いた馬のやうに狂ひ出しました。

七轉八倒するばかり。

感ずると共に、艦内の電燈は一時に消えて、艦は物に驚いた馬のやうに狂ひ出しました。驚く間もなく、右にも左にも、その恐しい響が續け様に起つて、今は全く瀧壺に落ち込んだ小魚同様、ゴウ／＼と唸る水音と渦巻く波とに、七轉八倒するばかりになりました。敵が潜水艦の大禁物なる水中で破裂する爆彈を投げ込み出したのです。この時、あなた方はつく／＼、勇敢な軍人の落ちつきといふものに感心されるでせう。御覽なさい、電燈が消えたと思ふと、要所々々にはパツと携帯電燈が灯ともされました。艦長の命令には少しも慌てた様子がありません。名人の手綱捌きもかくやと思はれるばかり、どこまで荒れ出すかと思つたこの艦も、

名人の手綱捌きもかくやと思はれるばかり。

機敏な人々の働により、まんまと乗り鎮められて、一息に二百呎の深海に潜り込みました。その中に、敵の矢種も盡きたらしく、もう爆弾の音も聞えなくなりました。

水雷を發射してからもう三十分、たしかに手應へはありましたが、その後の様子が心懸かりです。新式の大軍艦は二三發の水雷で必ず沈むものとは限りません。やがて「静かに浮き上れ！」の命令が下りました。艦は希望と不安との境をたどりながら、一尺々々と静かに浮かび上つて行くのです。そしてペリスコープの先がヌツと海面に出た時に、艦長の口許には會心の微笑が浮かびました。そして艦は再び深く水中に潜つて、この戦場を遠く離れましたが、や

一尺
約三十センチ。

艦長の口許には
會心の微笑が浮
かびました。

がて壓搾空氣でタンクの水を吹き拂つて、悠々と水面に浮かび出でました。

この時です、高々と押立てられるマストの先のアンテナから、今日の手柄が放送されるのは。

二三 春寒き多摩御陵に詣でて

九 條 武 子

如月の春まだ浅い日曜の晝、私たちは浅川の御陵奉拜のために、道を甲州路に取つて自動車を走らせた。曇つた空は薄日もささず、立ち迷ふ雲の往來も、けふの心持に似て、何か知らず物寂しい。

九條武子

歌人

男爵九條長致氏

夫人

京都の人

昭和三年(五六)

歿、年四十二

如月

昭和二年二月

浅川

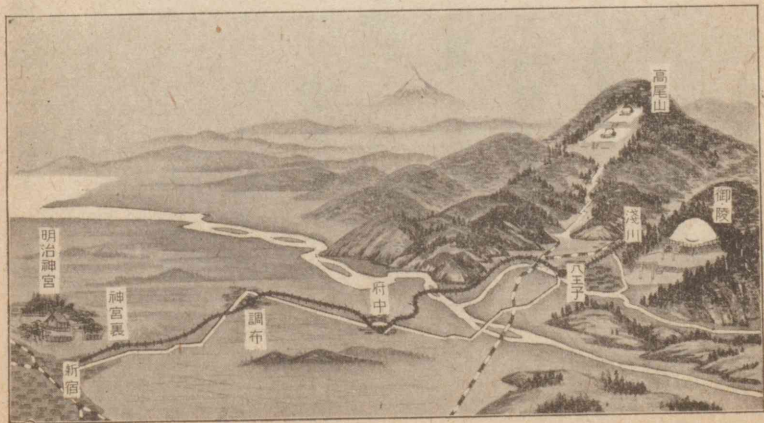
東京府南多摩郡

にある。

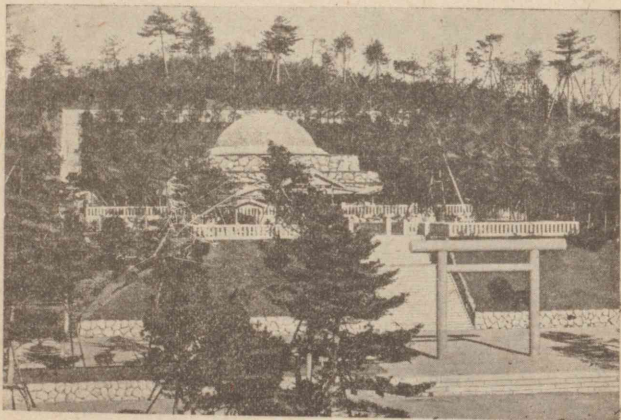
甲州街道
東京市新宿から
山梨縣甲府市に
至る街道の稱。

八王子市
東京市の西に當
り、東京府南多
摩郡にある。

甲州街道は、良い道であつた。自動車は都の北、平坦な長い道を靜かに走つてゆく。過ぎてゆく沿道の村々は、春の訪れもおくれて、まだ、冬籠の寂しい色につままれてゐた。八王子市の郊外に近づくと、一面の桑園である。今は知らず、昔は機織り暮したてもあらう家々の女等の仕事か、ゆかしくもまた懐かしいものと偲ばれる。村々を眺めてやゝ落ちついた眼



京王電車
東京市四谷區新
宿から八王子市
に至る電車。



多 摩 御 陵

に、市の店頭が急に花やかに映る。新宿からの京王電車は、こゝまで延びてゐる。こゝから浅川までは乗合自動車の便もあるが、乗客はいづれも御陵参拜の人たちであらう、何團體、何青年團の、紋服のもの、制服のものなど、お参りの人足は、こゝから浅川まで、間斷なくつゞいてゐた。御大葬のその夜、八瀬の童子がつかへまつつた葱華輦渡御の御有様を偲びつゝ、やがて東浅川橋を渡る。

浅川の河原の石もひとつびとつ泣きぬれにけむ
みはふりの夜を

御門を通つてから參道十數町の間には、鯨幕くじらまくが嚴かに引
きわたされ、幾百基の高張提灯が、先つ夜さきよのまゝなのも、哀し
みを新たにしして、胸の閉ぢらるゝ思がした。御若き御名代
の宮様が、あの寒夜を父帝の御喪主と立たせられ、御悲しみ
の御足どりも重たう進ませられたであらう、淨き玉砂利の
道が、今は一日幾萬を數へる國民が參拜の群に踏み固めら
れてゐるのである。

第二の御門の左側にある參集所で姓名を通じ、そこで手
を淨め口を嗽ぎ、守部もりべの人に導かれて、御柵内に參進した。

一町
約百九メートル
先つ夜
御名代の宮様
秩父宮殿下

重たう。

衛(衛)

おほけなさに

をろがむ

神域にはどかり
ある心地。

御幕の内には、近衛の兵士が、御靈を御守り參らせてゐた。
御鳥居を距る數歩の前に參進、そこで誠をこめて拜し奉つ
た。かしこき御靈のとしこし
へに神鎮まりたまふ御前と
思ふと、おほけなさに、おのづ
から頭かしこも垂れて、ひたすらに
心からの合掌をさゝぐるの
みであつた。



九條武子

みささぎのほとりま近うおほけなくをろがみま
つる今日のかしこさ

私たちは大まへの清らかな砂利を踏む足音も、神域には

ばかりある心地さへしつゝ、もとの參集所まで退いた。し
かしこのまゝおいとま申し上げることは、何となく御名殘
が惜しまれて、今度は、一般參拜の人たちの列に入つてもう
一度拜觀した。

大まへの左側に葱華輦が安置されてゐた。

にび色のたれ帛きぬおもしみすぬちの大みひつぎを

しぬびまつるも

八瀬のわらべ幸こそありけれいやはてのみとも

つかふる民多きなかに

先に拜した御鳥居、祭場殿を、尙ほもしみぐと拜し奉る
と、そこには日像にちざう、蠹旛くわん、月像げつざう、蠹旛を兩側にして、鉦鼓、御弓、大眞

みすぬち
しぬび
こそありけれ

い

榊も奉られてあつた。祭官はこゝに日供にちくを御供へ申し上
げるのであらう。

日のみはた月のみはたのならびたてり祭場殿の
その夜をしおもふ

靈柩をあげまゐらせたインクラインも、今は綺麗に芝生
を以て蔽はれてゐた。その高い上に、玄宮げんぐうがなかば半月形
に仰がれる。御須屋みすやの扉は固く鎖されて、御靈は永劫に長
房山の丘に、御安らげく鎮まりますのであつた。

短き私たちの生涯に於て大君の永劫とこの大行幸おほなみゆきを二度ま
でも送り奉ることは、何にたとへやうもない悲しき極みで
あるが、同時に泣いてもく泣き切れぬ奉悼の裡にしみじ

長房山
多摩御陵所在の
山。東京府南多
摩郡淺川村にあ
る。
二度の大行幸
明治天皇崩御
大正天皇崩御

輝く新日本の建設。

みと偲び奉るは、量り知られぬ御恩徳である。私たちは、御恩徳に對し奉り、たゞ報謝の誠をさぐるのみである。御詔の御示し給ふまゝに、新帝の良き民として仕へ奉り、輝く新日本の建設に努力するより外に、私たちの進むべき道はない。

挽歌。

櫟の雑木林は黙して立ち、夕べ近き淺川の里は、靜かに喪にこもつてゐるやうであつた。やがて冬枯の武藏野に春の光が訪れて、小鳥らも御陵のほとりに、可憐な挽歌をさげ參らすることであらう。

島崎藤村

文學者 名は春

樹

長野縣の人

明治五年生。

覚え。

さういふ。

一つとしてお伽話の情調を誘は

二四 桃

島崎藤村

三月の桃の節句は、五月の菖蒲の節句と共に、一年のうちのある祭の日の中でも、私達に特別の親しみを覚えさせる。それは季節の感じが深いといふばかりでなく、子供のための祝の日であるからでもあらう。最早この世に居ない身内の人達の形見として残つたやうな、古い雛などの取出されるのもさういふ日だ。幼いものはその日を迎へて自分等の生長を楽しみ、大人はその日を迎へて自分等の少年時代をなつかしむ。

白酒、菱餅、桃の花の掛物、三月の節句を祝ふもので、一つと

ないものはない。

童話と童謡の世界のものばかりだ。

やうに見える

してお伽話の情調を誘はないものはない。今にも合唱でも始めさうな雛、古風な少年音楽隊のやうな五人囃、そこにある一切のものが皆玩具だ。童話と童謡の世界のものばかりだ。あれは自分等の國にのみあるやうな子供の祭かも知れない。でも、優しい風俗だと思ふ。あの節句を祝ふ豆いりの種にも、紅と白とあつて、桃のつばみのやうに見えるのもよい。

生ひ先こもる少女の生命。

五月の菖蒲が男の兒にふさはしいやうに、桃の花はおのづから少女にふさはしい。二尺にも三尺にも及ぶほど勢ひ込んで延びて来て居るやうなその素生すなまを見たばかりでも、生ひ先こもる少女の生命を思はせるものがある。素朴

羞：耻

たとへやうもない

にふくらんだところは河柳の野趣に似て、もつと羞を含み、しかも處女らしい誇を見せて居るものは桃のつばみだ。長い冬を通り越して、黄梅、福壽草、連翹などの季節も過ぎ去り、梅には既に遅く、櫻にはまだ早いといふ頃に、桃の花の春が来る。ぽつぽつ暖かい雨がやつて来て草の芽を延ばす頃の楽しさは、何にたとへやうもない。雨毎に春の来るやうな氣のするのもその頃だ。まったく、桃の花の楽しさは、櫻や牡丹のやうに私達を酔はしてしまはないで、むしろ蘇生の思ひを與へるやうなところから来る。冷く無關心になつてしまつた私達の心を温めて、少年の春を懷はせるやうなところから来る。

我衣に
芭蕉の句。貞享
二年四十二歳の
吟。野晒紀行に
出づ。

伏見
今は京都市伏見
區。
西岸寺
天正年間創建。
任口上人
西岸寺三世實
譽。又如羊和尚
ともいふ。貞享
三年(一四二)四月
寂。
見やうのない

我衣に伏見の桃の雫せよ
桃に寄せて、こんなやさしい感情をいひあらはして見せ
た昔の人すらもある。桃のしづくは果してどんな衣を染
めたらう。これは可憐な婦人の身につける襦袢の袖にて
もうつりさうなものである。ところが、この處女のやうな
感情は、伏見の西岸寺といふところで任口上人といふ人に
あつた時の、昔の詩人の心胸から溢れて來て居るのだから
床しい。

桃は葉も好ましい。あの細長い葉の光つたのは、何とも
いつて見やうのない生氣を感じさせる。茂り重なつた葉
の間に、小さな球のやうな青い實をつける頃もよい。氣の

あつた友達とでも連立つて、やゝ疲れた時に、小鳥のさへづ
る聲でも聞きながら靜かに歩いて見たいのは、桃の葉のか
げだ。
『市井にありて』

二五 五箇條の御誓文 徳富蘇峯

五箇條の御誓文は、實にこれ維新大改革の宣言書である。
日本帝國の新時代に於ける第一聲である。過去に於ける
三千年の歴史を一括し、將來に於ける幾千載の國是を指定
したる帝國不磨の寶典である。其の起草者の何人である
かを吟味する必要は毫もない。何となれば、これは一人一
箇の意見に成つたものではなく、實に時代の一大志望、舉國

徳富蘇峯
名は猪一郎
思想家
貴族院議員
帝國藝術院會員
東京日日新聞社
賓
熊本縣の人
文久三年生

給うた

紫宸殿
京都御所の正
殿。
率ゐ

論、倫、論

の一大渴仰を、明治天皇の御名もて神明に誓はせ給ひ、天下に示し給うたものであるからだ。

抑、五箇條の御誓文は、維新の詔書と同時に成つたもので、實に明治元年三月十四日、天皇紫宸殿に御し、群臣を率ゐて祖宗の神靈に誓ひ、之を中外に宣し給うたものである。

一、廣く會議を興し、萬機公論に決すべし。

これが明治二十二年、帝國憲法によつて、帝國議會を開設し給うた根元である。而して此の會議を起し、衆に諮るは、我が上代歴史に示す如く、祖宗以來の慣行である。

一、上下心を一にして、盛に經綸を行ふべし。

これは舉國一致、以て國運を進捗せしめ、帝國の世界に對

する天職を遂行することを意味したものである。

一、官武一途、庶民に至る迄、各其志を遂げ、人心をして倦まざらしめんことを要す。

此の一條中の主眼は、「其志を遂げ」の點にある。其の志を遂ぐることは、國民の志望を遺憾なく發揮せしむることを意味する。それたゞ其の志望を發揮し、日に就り、月に將む。故に自ら倦むところを知らぬ。

一、舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし。

これが維新大改革の中樞點である。長き歴史ある國民は、動もすれば其の歴史に拘り囚れて、其の歴史の最も不必要な部分、最も有害の部分、即ち過去の糟粕とか、塵垢とか云

況いんや…をや
況いんや

ふ部分に執着するものである。故に建國の大精神に顧みて之を一洗する必要を生ずる。如何なる家に於ても、一年に一回乃至兩回の大掃除は必須である。況んや國に於てをや。復況んや其の國數百年鎖國の状態に停滯したるに於てをや。

茲に天地の公道と特書せられたるは、單に一國一州の舊例故慣を株守せず、進んで世界共通、人類總體の奉じて以て公道と爲す所を、正視闊歩すべきを示し給うたもの。

一、智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし。
讀んで字の如し。殊更吾人の説明を要しない。

我國未曾有の變革を爲んとし、朕躬を以て、衆に先んじ、

羅針盤であり、
燈明臺であり、
案内標である。

天地神明に誓ひ、大に斯國是を定め、萬民保全の道を立んとす。衆亦此旨趣に基き、協心努力せよ。
如何にもあり難き思召である。此の五箇條の御誓文は、實に帝國の向ふ所、國民の趨く所を指點したる羅針盤であり、燈明臺であり、案内標である。吾人が維新の大精神に立返れと云ふのは、とりも直さず此の五箇條の御誓文に立返れと云ふのである。

〔國民小訓〕

純正女子國語讀本 卷四 終

文部省ノ御指示ニヨリ
昭和十三年六月一日一
部修正

昭和十二年七月二十五日印
昭和十二年七月二十八日發
昭和十三年一月二十五日訂正再版印刷
昭和十三年一月二十八日訂正再版發行

純正女子國語讀本改訂版

各卷定價金六十錢



編纂者	五十嵐 力
發行者	東京市牛込區原町二丁目四十六番地 山田 謙 吉
印刷者	東京市牛込區榎町七番地 五十嵐 良 晃

◆發行所 東京市牛込區原町二ノ四六 早稻田圖書出版社

振替東京一三六一五三番

◆關西特約販賣所 大阪市東區北久太郎町四ノ一六六 鱈柳原書店

